弘　道

第百二十四巻第一一〇五号
平成二十八年十二月三十一日発行

第 1105 号

特集　グローバル化時代にどう向き合うか

弘道シンポジウム２０１６の記録

主催者代表挨拶 ……公益社団法人　日本弘道会会長　鈴木　　勲
来賓祝辞 ……文部科学大臣　松野博一殿

〔基調講演〕
グローバル化時代にどう向き合うか　　渡辺　利夫　先生

〔シンポジウム〕
パネリスト　　平川　祐弘　先生
田村　哲夫　先生
髙坂　節三　先生
コーディネーター　　土田　健次郎先生

【連載講座】論語入門（五） ……土田　健次郎
―― 孔子のただ一つの自慢 ――

平成28年 11～12 月号

日　本　弘　道　会

弘道シンポジウム2016開催

（平成28年10月25日（火）　東京神田・学士会館
主催　公益社団法人 日本弘道会
後援　文部科学省・日本道徳教育学会）

主催者代表挨拶

基調講演・渡辺利夫先生

会場全体風景

日本弘道会綱領（昭五一・一〇・三〇）

甲　号（個人道徳）

皇室を敬愛すること、国法を守ること
信教は自由なること、迷信は排除すること
思考を合理的にすること、情操を美しくすること
学問を勉めること、職務を励むこと
教養を豊かにすること、見識を養うこと
財物を貪らないこと、金銭に清廉なること
家庭の訓育を重んずること、近親相親しむこと
一善一徳を積むこと、非理非行に屈しないこと
健康に留意すること、天寿を期すること
信義を以て交わること、誠を以て身を貫くこと

乙　号（社会道徳）

世界の形勢を察すること、国家人類の将来をおもんぱかること
政治の道義性を高揚すること、経済の倫理性を強調すること
自然の美と恩沢を尊重すること、資源の保存と開発を図ること
教育の適正を期すること、道義の一般的関心を促すこと
報道言論の公正を求めること、社会悪に対し世論を高めること

会祖西村茂樹先生小伝

日本弘道会の会祖・西村茂樹先生は、明治六年森有礼・福沢諭吉・西周・加藤弘之・中村正直らと相図り「明六社」を設立。『明六雑誌』を発行して、開化思想、自由思想の啓蒙運動を精力的に展開いたしました。

その後明治九年三月には、国民の道義向上を目指し、さらに国家社会の基礎を強固にするための道義教化団体として、「東京脩身学社」を創設しました。これが現在の「日本弘道会」の前身であります。明治十九年には『日本道徳論』を公にして、当時、西欧の模倣と追随に終始していた社会の風潮と政治の在り方を厳しく批判し、日本道徳の確立を訴えました。

西村茂樹先生は、明治時代における卓越した道徳学者であり、同時に偉大な国民道徳の実践家でもあります。明治二十六年、宮中顧問官を除くすべての官職を辞して野に下り、全国を行脚して社会道徳の高揚に一身を捧げ、今日の生涯教育の先駆的役割を果たされました。

目　次（第百二十四巻第一一〇五号　平成二十八年十一・十二月号）

【表紙裏】写真　弘道シンポジウム二〇一六開催
日本弘道会綱領・会祖西村茂樹先生小伝……(1)

―＊　＊　＊―

特集　グローバル化時代にどう向き合うか

――弘道シンポジウム二〇一六の記録――

主催者代表挨拶　公益社団法人　日本弘道会会長　鈴木　勲……(4)
来賓祝辞　文部科学大臣　松野博一　殿……(6)
【基調講演】
グローバル化時代にどう向き合うか　渡辺利夫　先生……(8)
【シンポジウム】
パネリスト　平川祐弘　先生
田村哲夫　先生
髙坂節三　先生
コーディネーター　土田健次郎　先生……(18)

講師等プロフィール……(51)
弘道シンポジウム二〇一六実施概要……(52)
弘道シンポジウム二〇一六アンケート……(54)
―＊　＊　＊―
【連載講座】論語入門 (五)――孔子のただ一つの自慢――　土田　健次郎…(55)
【資料】西村先生論語講義速記　第三回（その二）……(60)
【寄稿】自然災害と人の心　空に飛ぶ気と心
（そして地球の病的発作と治癒力の考察）……瀬川　爾朗…(64)
〈弘道余話〉(20) 有田支会……鈴木　勲…(71)
【北斗星】トランプ新大統領と安倍外交……澤　英武…(72)
【熟年からの健康】(54) 肺炎球菌ワクチン……松本　慶蔵…(73)
【読書案内】池田潔著『自由と規律』……多田　建次…(74)
【モニター便り】……(75)
会告……(81)
公益社団法人日本弘道会会員名簿（平成28年12月1日現在）……(82)
事務局往来……(91)
支会だより……(92)
言葉のひろば……(93)
編集後記……(94)

【弘道シンポジウム二〇一六】

主催者代表挨拶

公益社団法人 日本弘道会会長
鈴木　勲

本日は、日本弘道会の例年の行事である「弘道シンポジウム二〇一六」を開催いたしましたところ、全国各地から多数の会員、有志の方々に御参加頂き、このように盛大に開催できますことは、主催者として誠にうれしく、心から御礼申し上げます。

御後援頂いている文部科学省からは、文部科学大臣代理として有松育子生涯学習政策局長にお出で頂きました。後ほど文部科学大臣の御祝辞を頂くことになっておりますが、この場を借りて御礼申し上げます。

また同じく御後援頂いている日本道徳教育学会からは高島元洋（もとひろ）副会長にお出で頂いております。

日本弘道会は、創立者西村茂樹の提唱する「人心を正しくし風俗を善くする」という理念を追求し、明治・大正・昭和・平成と百四十年に亘り、道徳教育振興に努めて参りました。

平成九年度以降は、その運動の一環として「弘道シンポジウム」を開催し、その時々の社会情勢に応じて、適切なテーマを設定し、道徳の重要性や日本人の生き方等について広く社会に訴え、多くの方々の賛同と支持を頂いて参りました。

前回は、「今、家族の何が問題か」をテーマとして、現在進みつつある我が国の超高齢化社会において、

家族が抱えている問題と家族の意義や在り方、家族再生の意義等について考えることにいたしました。

今回は、いわゆるグローバル化時代の到来を迎え、グローバル化時代における日本及び日本人の在り方等について考えることにいたしました。

幸いに基調講演には、拓殖大学前総長の渡辺利夫先生にお引き受け頂きました。先生の論説は「弘道」平成二十八年一・二月号に展開されており、貴重なお話が頂けるものと期待しております。

また、パネリストには、平川祐弘（すけひろ）、田村哲夫、高坂節三の諸先生にお願いし、コーディネーターは本会の土田健次郎副会長にお願いいたしました。

短い時間ではありますが、このシンポジウムを通じて、ご参会の皆様と共に、グローバル化時代における日本人の在り方について考えを深め、これからの人生において役立つことができますならば、望外の幸せであります。

最後になりますが、日本弘道会と日本道徳教育学会の共同研究で進めて参りました「修身教育の研究」の五年間の成果がまとめられ、「近代日本における修身教育の歴史的研究―戦後の道徳教育までを視野に入れて―」と題して刊行し、「道徳の教科化」の実施に役立つと共に、今後の我が国の道徳教育の研究に資することを期待しております。

以上のご報告を申し上げ、今後とも日本弘道会に対する格別のご支援とご協力を賜りますようお願いして、主催者の挨拶といたします。

【弘道シンポジウム二〇一六】

来賓祝辞

文部科学大臣　松　野　博　一　殿
代読　生涯学習政策局長　有松育子殿

本日、公益社団法人日本弘道会主催「弘道シンポジウム二〇一六」が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

日本弘道会は、明治九年に国民道徳の振興及び道義国家の建設を目指し道徳振興団体として創立されて以来、百三十年以上の長きにわたり、その理念の下、講演会や研究会の開催などの活動を通して、日本の道徳の確立に取り組んでこられました。関係の皆様のこれまでの御尽力に深く敬意を表します。

「人づくりは国づくり」、日本の将来を担う子供たちは国の一番の宝であり、教育は、国の根幹を形づくる最重要政策です。情報通信技術の進展、少子高齢化の急速な進行、予想困難な自然災害の発生など、昨今の急激な社会情勢の変化の中で、一人ひとりが自らの価値観を形成し、人生を充実させるとともに、国家・社会の持続可能な発展を実現していくことが求められています。

特に、グローバル化が急激に進展する時代の中においては、絶え間なく生じる新たな課題に真摯に向き合い、自分の頭で考え、また他者と協働しながら、より良い解決策を生み出していく力を育むことが不可欠です。

日本弘道会におかれては、これまで道徳の振興に関するシンポジウムやフォーラムを数多く開催され、子供たちの道徳教育の在り方や、人と人とのつながり、地域の絆の大切さなどについて、広く社会に訴える活動を継続して行ってこられました。

文部科学省においても、学校教育における道徳教育の改善・充実に向けてしっかり取り組んでいくとともに、これからの厳しい時代を生き抜くために、地域と学校が連携・協働して地域づくりを行い、社会総掛かりで地域への愛着を醸成し、地域の将来の担い手を育む取組を推進しているところです。

本日開催されます弘道シンポジウム二〇一六は、グローバル化時代における日本及び日本人の在り方について議論されると伺っております。グローバル化時代の中にあっても、社会に参画し、日本人としてのアイデンティティを持つことは重要であり、非常に意義深いテーマであると考えます。

政府においても、あらゆる場で、誰もが活躍できる、いわば全員参加型の社会である一億総活躍社会の実現を目指しております。一人ひとり、それぞれの人生を大切にする考え方が一億総活躍であり、日本の未来を創るのは、我々日本人自身です。本シンポジウムが、自分たちが住む日本、そして日本人である自分自身について考えを深めていくための契機となりますことを願っています。

結びに、本シンポジウムの御成功と、日本弘道会の今後のますますの御発展、本日御出席の皆様の一層の御活躍を心から祈念いたしまして、私からのお祝いの言葉といたします。

平成二十八年十月二十五日

文部科学大臣　松野　博一

基調講演

グローバル化時代にどう向き合うか

渡辺利夫先生

ご紹介いただきました渡辺利夫です。シンポジウムの基調講演者としてお招きくださり、大変光栄に思っております。早速、主題に入らせていただきます。

グローバリゼーションの時代

時代の潮流はグローバリゼーションだといっていいと思います。金、人、モノ、技術、情報といったものが、まるで国境がないかのように地球をぐるぐると回っております。ある人はボーダーレスの時代だと言いましたけれども、特に経済活動は国境なきがごときであります。

地球という球体、つまりグローブが一つのまとまりを持ったような、まさにグローバリゼーション時代の到来であります。運輸、通信、技術の目覚ましい進歩がこの時代を帰結したのです。国内の一地方でさえも、グローバリゼーションに背を向ければ、辺境化を余儀なくされかねないと言ってもいいような時代がやってまいりました。

最も典型的なのは金融です。金融は相互に深く結び付いた、一つのグローバルな世界に既になっています。一国の株価も為替レートも金利も、国際的な経済政治動向に応じて変動せざるを得ないのが現状であります。

物の取引においても関税・非関税の制約は、もはや完全に過去のものになりつつあります。サービス貿易においてさえ、自由化の波が押し寄せつつあります。

企業はグローバルな観点から、その立地を考慮するようになっております。家電製品や自動車においては、日本企業の生産額は国内よりも外国のほうがかなり大きくなっています。ビジネスや観光や留学のための海外との人的交流は、少し前と比較すると信じられないほどの密度になっていることは、ご承知のとおりであります。

日本人の、とりわけ若者は、このとうとうたるグローバリゼーションの時代にあって日本丸という船を自在に漕ぎながら、未来を切り拓いていかねばならないと思われます。

異文化に深い関心を寄せ、外国語を操るコミュニケーション力を持つグローバリストとして活躍する人材の養成は、現代の日本、特に教育機関にとって不可避の課題であると言わねばなりません。

日本の近代化への覚醒

しかし、グローバル人材の養成には一つの前提条件があります。日本の若者たちに自国の歴史、文化、伝統、総じて日本文明に対する理解と愛情を持ってもらうことがまずは肝要だと私は考えます。

日本は四方を海に囲まれた海洋の共同体として、独自の文明を築いてまいりました。もちろん、完全に独自の文明圏であったとは言い切れません。古代の国づくりの時代にあっては、隋や唐に遣隋使や遣唐使を送って、中国の法律や制度の導入に努めた時代がありました。明治維新後の日本は、欧米の文明を躊躇なく導入して、近代主権国家へと変じました。帝国憲法も帝国議会も、欧米に範をとって創設されました。日清、日露という明治国家の国運を賭した戦いでの勝利も、武器の体系や戦術さえも、欧米のそれを果敢に学び取って手にしたものでありました。第二次大戦後の日本がアメリカから受けた政治的・文化的な影響力には、ご承知のように多大なものがありました。

それにもかかわらず日本が中国化、あるいは欧米化して、独自の文明を否定することはありませんでした。そうではなくて、日本は往時の中国や欧米の先進的な制度や法律や技術を導入しながらも、これらをしなやかに日本化しながら、日本文明をますます盛んにしていったのではないかと私は考えております。日本人は他文明への自在で柔軟な対応により、今日の日本を形づくってきました。日本は往時の中華システムと呼ばれる中国を中心とした東アジア秩序、これは専門用語で「冊封体制」と呼ばれますが、この秩序の中に組み込まれることのなかった、東アジアにおけるほとんど唯一の存在であります。あの苛烈な帝国主義の時代にあっても、欧米列強の植民地となることのなかった例外的な国が日本であります。

幕末、維新の文明開化の時代、世界は帝国主義の時代でありました。アジアのほとんどの国々は、欧米の産業革命を支える原材料の供給地として、あるいは製品の販売市場として暴力的に開国を余儀なくされました。そして、不平等条約の締結を強要され、ついには植民地として列強の領土とならざるを得なかったのであります。

しかし、日本は列強に屈することはありませんでした。明治維新を経たばかりの我国の政治指導者と国民は、列強の支配から逃れる唯一の道は、自らが文明化することだと決意したのでありましょう。文明開化、殖産興業、富国強兵、こういったスローガンのもとで、弱者に安住の地のな

かったこの時代を、日本は逞しくも生き抜いたのであります。

日本文明とは何か

それでは、日本文明とは何か。他国とは異なるどんな固有の体質、つまり国柄を持った国家なのかといったことについて、少々考えてみたいと思います。私は、日本の国柄は次の三つのキーワードで語ることができるのではないかと、かねてより考えております。一つは、「同質的（ホモジーニアス）」、二番目は「自成的（オートジェニック）」、三番目は「連続的（コンティニュアス）」、この三つの形容詞で語られるのが適切ではないかと考えております。

第一に、日本は四方を海で囲まれた海洋の共同体です。同一の国土の中でほとんど同種の人々が、他国では使われていない、その意味で孤立的な言語である日本語を用いながら生を紡いでまいりました。宗教上の争いが日本に亀裂を生じさせることもありませんでした。第二次大戦直後の一時期を別にすれば、日本が他国の占領下に置かれたことはありません。つまり、同種の人々が孤立的言語の日本語を使い、宗教上の亀裂もない同質社会。これが日本の国柄のまずは一番大きな特質ではないでしょうか。こういう同質社会は、世界の中でも日本以外に探し出すことはなかなか難しいのではないかと私は思います。

しかし、このことは日本が外国から何も学ばなかったことを意味するものでは、決してありません。古代律令国家の時代にありましては、国家形成のために日本は中国から多くのことを勉強いたしました。

しかし、一〇世紀初期に唐王朝が滅亡しました。それ以来、大陸からの影響力は急速に失せてしまったのです。そして、日本独自の国家秩序が形づくられていったのであります。七世紀初めには、天皇という特有の称号と固有の年号が設定されました。そして、国名を日本としたのであります。以来、一三〇〇年の連綿たる歴史が営まれてきました。

繰り返しますが、世界史上に類例を持たない同質社会、ホモジニアスな社会が日本だと私は思います。日本が同質社会であることは、お隣の中国と比較してみれば歴然とします。ご承知のことと思いますが、中国の歴史を彩るものは王朝の反覆転変史であります。これは易姓革命と呼ばれています。つまり、徳を失った皇帝は新たに天命を授かった支配者によって、命を革（あらた）められます。これが革命です。「革」は改めるという意味です。また、皇帝の姓も革（あらた）められるのです。これが易姓です。つまり革命の「革」も易姓の「易」も、いずれも「あらためる」という意味だと言うことができます。

今お話ししている中国では、北方の騎馬民族や遊牧民族

による征服王朝さえ、しばしば出現いたしました。長い歴史の中で比較的近くを見ますと、モンゴルによる征服王朝である元朝があります。満州族による征服王朝、清朝があります。つまり、多様な民族の混在する異質社会です。同質ではなく、異質、ヘテロジニアスな社会なのです。ホモジニアスではなくてヘテロジニアス・ソサエティ、これが中国であります。これに対して日本の社会は、これは梅棹忠夫先生の『文明の生態史観』から学んだことでありますが、人類学の用語法で言いますと、同質社会・日本の発展は自成的である、自ら成るというわけです。異質社会・中国の発展は他成的だということになります。他の文明の影響力を非常に強く受けて成った文明である。自成的、他成的と分けるならば、日本文明は自成的であり、このことが日本文明の大きな特質だというのが私の主張であります。

ここからおそらく自ずと出てくる表現でありますが、日本の歴史は連続的である。一方、中国の歴史は際立って非連続的であります。異民族の征服や反乱、権力内部の大逆や謀反に彩られたものが中国史であります。

これに比べれば日本は、はるかに平穏な歴史を紡いでまいりました。同質的で自成的で連続的な歴史を持つ日本人の体質がそうさせたのではないかと、私は想像するものであります。私が先ほどから日本を「海洋の共同体だ」と何度も言っているのも、そういう私の歴史感覚ゆえであります。

この大いなる共同体、同質的で自成的で連続的な歴史を持つ日本という国のありようを、目に見える形として私どもの前に現出させてくれているものが天皇なのではないでしょうか。

現憲法では、第一章に「天皇は日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴である」となっております。確かにそう言っていいのですが、それだけでは少し物足りない感じを私は持っております。

むしろ天皇は、日本という国家と民族の連綿として続く歴史の象徴だと言ったほうが的確であろうと、私は考えております。私が考えているというよりも、あとでシンポジウムのパネリストとしてご出席の平川祐弘先生は、あるエッセイの中で次のように言っておられますが、この表現が私の胸には大変強く響きます。以下は平川先生からの引用です。ちょっと読ませてください。

「天皇は敗戦後の憲法の定義では国民統合の象徴だが、歴史に形づくられた定義では民族永続の象徴である。個人の死を越え、永世を願う気持ちこそ、天皇と国民を結ぶ紐帯である」。かねて私の胸の中にあって形にならなかった感覚が、平川先生のこの卓抜な言語化によって少し霧が晴れたような気分になっています。

しかし、物事には全て両面がございます。同質的な日本

の社会には、対外的な危機意識が育ちにくかったのではないでしょうか。日本は国家観念を希薄化させたままで、長らく打ち過ごしてきたように思います。この日本に向けて十八世紀、血生臭い抗争を繰り返してきた欧州の各国が、市民革命を経て近代国家を成立させ、さらに産業革命を通じて、国力と軍事力を格段に強化しました。そして市場と領土を求めて、アジアや日本へと進出してきたのであります。

他方、平和を享受する江戸時代の日本は、軍事技術の発達に関心を寄せることはさしてありませんでした。イギリスが圧倒的な軍事力により清国を屈服させて、香港島を奪取した出来事がアヘン戦争であります。このアヘン戦争に接し、日本の指導者は強烈な衝撃を受けました。アヘン戦争から一〇年余後にアメリカの黒船が来航します。そして日本は開国を余儀なくされました。また同時に、アメリカはもとより英仏蘭露との間で不平等条約、つまり関税自主権が持てず、治外法権をも許す屈辱的な不平等条約を結ばされるはめになったのです。しかしそれにもかかわらず、アジアのほとんどすべての国が欧米列強の隷属下に置かれる中にあって、一人日本のみが独立を保ちえたことは特記されなければなりません。

同質的で自成的で連続的な歴史を持つ日本は、ひとたび急迫の事態に直面するや、これに抗する力を一気に凝集する高い政治能力を見せたからだと私は考えております。開国に対する日本人の初めの反応が尊王攘夷でしたが、この運動は一瞬の花火のごときものでした。長州藩は英米仏蘭連合軍の火力に、下関で圧倒されます。薩摩藩が薩英戦争でもろくも敗北してしまいました。その後、瞬く間に薩長は攘夷論から開国論へと転じます。そして富国強兵の緊急性を悟らされます。これが王政復古の明治維新へとつながっていったのです。

この王政復古は固陋なアンシャン・レジーム（旧体制）への回帰では全くありません。江戸開城と同時に、新国家建設の大方針が五箇条の御誓文として発布されましたが、これが後の近代的立憲国家創造の礎となったのであります。五箇条の御誓文の第五条にはこうあります。「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」であります。「皇基」とは、天皇が国を治めるための基礎といった意味です。鎖国、攘夷からのこの見事な反転こそが、実に日本と日本文明の真骨頂と言えるのではないでしょうか。

明治時代、日清・日露戦の勝利、大日本帝国憲法制定、帝国議会招集などの近代主権国家としての力量を、日本はいかんなく発揮したのであります。これらは同質的な日本人社会の持つ、強い政治的凝集力のゆえであったに違いないと私は思います。大正期に入りますと、普通選挙法が成立します。民主主義的法制度も急速に整備されていったの

です。日本人が譲ってはならない晴れがましい文化的伝統を持つ国家、これが日本であることを私は憲法に明記しなければならないと考えております。

日本が大いなる国民共同体としての国家の凝集力を再生させなければ、膨張する大陸国家とは対峙することも、ひょっとすると共存することさえ難しいのではないかという感覚が最近の私にはあります。

日露戦争とは何であったか

ここで私は日本近代史の中の極めて重要な出来事であった日露戦争について、少し触れさせていただきたいと思います。当時のロシアは世界最大の陸軍軍事力を擁した大国でしたが、その南下政策には大変激しいものがありました。この南下政策に抗して、日本はロシアに挑んで勝利したのです。日露戦争における日本の勝利は、世界史的な出来事でありました。非白人国家の日本が白人国家・ロシアに挑んで、これに勝利したという意味で、人類史上の画期であったと言ってもいいほどであります。日露戦争の勝利が、欧米列強の支配に隷従してきたアジアの国々の民衆にどんなにか強い勇気を与えたものか、現代人には想像もつかないことかもしれません。

イギリスの植民地であったインドにおいて、対英独立闘争を指導した人物がジャワハルラル・ネルーです。独立後、インド初の首相になった人であることは、ご承知のとおりです。ネルーはイギリス軍によって拘束、長期に渡って獄中にあることを余儀なくされました。

このネルーが獄中から娘のインディラ・ガンジーに宛てた膨大な書簡のコレクションがあります。これが『父が子に語る世界歴史』、これはみすず書房から出ており、現在も買うことができます。この中で、ネルーは次のように言っております。「イギリスからの独立に自分の生涯を賭けようと決意させたものは、日露戦争における日本の勝利でした。日本のように団結してことにあたれば、独立は必ずや成し遂げられることを、日本の勝利は私に教えてくれたのです」。

また中国の話ですが、日露戦争での日本の勝利に勇気づけられた孫文は、戦争直後に日本を訪れます。そして、ここで中国同盟会を結成して、これが辛亥革命と呼ばれ、清王朝を打倒し、中華民国と称される近代国家への道を拓いたのであります。

新渡戸稲造

この日露戦争に勝利した日本は、第一次世界大戦という、イギリスを中心とする連合国軍の対独戦に参戦します。第一次世界大戦でも日本は戦勝国となったのです。その結果、日本は第一次世界大戦後の世界秩序再編のために設立され

た国際連盟の五つの常任理事国の一つとなりました。

この国際連盟の事務次長として、鋭く対立する列強の利害調整に辣腕をふるった人物が新渡戸稲造であります。国際連盟本部のあったジュネーブは、国際政治の修羅場のようなところであったに違いありません。新渡戸はここで国際間の調整に水際立った能力を発揮したようです。当時、ジュネーブの星と言われたそうです。新渡戸は戦前期、日本を代表するグローバリストであったわけです。

しかし同時に新渡戸は『武士道（*Bushido:The soul of Japan*）』を英文で出版し、日本人の精神の根底には武士道の徳目があることを説いております。説いたばかりではなく、その徳目を自ら体現したナショナリストが新渡戸稲造でした。それゆえ新渡戸は「背広を着た侍」だと、当時のジュネーブで語られていたそうです。

つまりナショナルであることがグローバルであることの前提条件である、そういうことを新渡戸の人生の中に私どもは確認することができるのではないでしょうか。

グローバル人材の養成とは、現在、日本のどこの教育機関でも謳われているメッセージですが、グローバリストは自然に生まれるものではない。ナショナル、つまり日本の長く深い文化的伝統に対する理解と敬愛の念があって、その上に初めて生まれるものではないかと私は思います。

第一次大戦での勝利により日本が新しい帝国主義国家となって、アジアの侵略に加担したという記述が中学校や高等学校の歴史教科書には多く見られますが、これはいかにも一面的な歴史解釈ではないかと私は思うのです。列強によるアジア支配の苛烈を、いずれの文明国よりもリアルに理解していた国が日本であったと私は思います。

先ほどもちょっと言いましたが、日本は開国に際して欧米列強に関税自主権を認められず、治外法権をも飲まされた。そういう屈辱を経験してきた国が日本であります。この不平等条約を完全に覆すのに、日本は明治の全期間を要したのです。

また、当時、貧困から脱することのできなかった日本人は、ハワイ、アメリカに移民として大量に出向きました。ご承知のことと思います。この移民の真摯で勤勉な仕事ぶりに、アメリカ人は恐怖にも似た感情を抱き、排日移民運動が噴き出しました。

非白人に対する白人の優越が、何の不思議もなく受け入れられていたのがこの時代のことであります。非白人国家の日本が第一次大戦に参戦し、勝利したという事実もまた列強の嫉妬を誘発します。黄色人種が世界に災いをもたらすという黄禍論（イエローペリル）ですね、黄禍論が欧米の国家指導者や民衆の心に刻み付けられていたのであります。

第一次大戦後の講和条約が、ご承知のパリ講和条約です。

この会議に出席した日本代表による人種差別撤廃提案は、画期的なものでありました。欧米列強と被支配民族、白人と非白人の世界のはざまで深く悩まされてきた日本の提案です。それがゆえに、多くの参加国に強く深い共感を呼び起こしたのであろうと思います。

提案の末尾はこうです。「今次世界ノ新組織ニ於ケル国際関係ノ基礎トシテ、各国民ノ平等及ビ其ノ所属各人ニ対スル公正ナル処遇ノ原則ヲ確立セムコトハ、正ニ純理ニ適合スルモノト思惟ス」と。往時の文章は大変難しいですね。

各国民は平等であり、どこに住んでいようと、その人間は公正に遇せられなければならないという意味です。おそらくアメリカにおける日本人の排日移民運動も頭にあって、こういう提案になったのだろうと想像されます。それはともかくとしても、日本のこの提案は、千人に及ぶ各国代表の深い共感を呼び、彼らの絶大な賛同を得ました。代表権を持つ国々の評決でも、賛成一一、反対五ですから、賛成多数となったのです。

しかし、議長を務めたのがウッドロウ・ウィルソン、つまりアメリカ大統領であります。ウィルソンは「このような重要案件については、全会一致でなければならない」と発言して、議長の裁定によりこの提案は否決されてしまったのです。まことに不条理な否決であります。

このときの全権代表は牧野伸顕でした。牧野は強硬な抗議演説をしたのですが、むなしく響くのみでした。日本提案が多数決の原理からいえば承認されたものだと、議事録にちゃんと記しておけと約束させたうえで、議会をあとにしたそうです。大正七年のことでありました。

時代はもうちょっとくだりますけれども、そういう日本を深く愛した一人のフランス人について触れておきます。大正一〇年に日本に赴任したフランスの駐日大使に、ポール・クローデルという人がいます。クローデルは昭和二年に日本を去ったのですが、日本の文化や伝統に深い共感を生涯持ち続けた人だったそうです。

昭和一八年は第二次大戦の真っただ中で、日本の敗色が極めて濃くなった年ですが、そのときにパリでクローデルは記者会見に臨んで、次のように述べたそうです。

「この地上でどうしても滅んでほしくない一つの民族があります。それは日本人です。あれほど深い文明をそのまま現代に伝えている民族は他にありません。日本の近代における発展には大変に目覚ましいものがありますが、私にとっては少しも不思議なことではありません。日本は太古の時代より文明を積み重ねてきたからこそ、明治になって急速な発展が可能となったのです。どの民族にも、これだけの発展を可能にするだけの資格があろうとは思われません。しかし、日本人にだけはその資格があるのです。古くから文明を積み上げてきたからこそ、その資格があるので

す」。そして、記者会見の最後を、次のように結んでおります。「日本人は貧しい。しかし高貴である」。日本を徹底的に理解した一人のフランスの知識人が、昭和十八年という民族の攻防を賭した戦いで、日本がまさに滅亡せんとするそのときにこのように語って、往時の日本人の心をゆすぶったことを、私どもは記憶にとどめておく必要があるのではないかと思うのであります。

グローバル化時代にどう向き合うか

さて、時代はまさにグローバリゼーションの潮流の中にあります。この時代を雄々しく開拓していくためのしなやかな精神と肉体を持つ若きグローバリストを、私どもは輩出していかなければならないと思います。現代日本の重要な課題が、グローバル人材の養成であります。私どもが養成するグローバル人材とはどのようなものであるべきか、私なりに申し上げてきたつもりですが、このことをまとめて最後にお話ししたいと思います。

グローバルであるためにはナショナルであることが不可欠の条件です。日本の文化・伝統についての深い理解、日本の歴史への強い愛着の念を若者に持ってもらわなければなりません。私どもは個として生きていくと同時に家族の一員であり、それぞれの組織の成員であり、大いなる共同体としての日本という国家の公民であるという自覚を持たずして、激しく変動するグローバリゼーションの時代の中を逞しく生きていくことはできないと私は思います。

つまりグローバル人材養成の第一は、日本人としての誇りと晴れがましさを持った人間を養成することであろうと思います。そのことを強調してきたつもりであります。

第二の要件は、次のことであります。グローバリゼーションというのは、極めて多様な異文化の人間と協調的な関係を築き、時に緊張をはらみつつ彼らと抗することをも要する、そういう時代でもあります。柔軟であると同時に、勇敢な人間でもなければならないと思います。

そのためには、よき日本人であると同時に異文化への強い関心を持ち、これを深く理解し、異文化への敬愛の念を持つことが必要です。グローバルな人間であるためには、この球体を構成する諸地域の文化や伝統の学習、つまり地域研究を欠かすことはできません。異文化の人々との深い人間関係を築くには、彼らとのコミュニケーションのためのツールである外国語の運用能力の錬磨をも要します。

それぞれの言語には、それぞれ異文化の精神と文化が凝集されています。外国語を習得するということは、同時にその言語集団の人々の感じ方、考え方、価値観のあり方を学ぶことにも通ずるわけであります。

日本の大学は、海外で働く多くの人材を輩出すると同時に、留学生にも大きく門戸を開き、留学生教育にも熱心に

取り組まなければなりません。また、日本人学生には海外での現地研修を通じて、現場での体験を多く積んでもらう必要があります。

卒業後、社会に巣立ち、グローバル人材として活躍するためには、大学教育のできるだけ早い段階、学生の吸収力と好奇心の最も豊かな十代最後の時期に異文化の人々とともにフィールドで汗をかきながら、どんな小さなことでもいい、異文化の他者のためになにがしかいいことができたという実感を持たせることが、彼らの人生にとって重要な意義を持っていると、私は経験的に感じております。

私が大学でゼミナールを持っていた時のことですが、学生共々マニラに出向いてストリートチルドレンの救済活動に精を出したり、インドネシアでは貧困地域でのコミュニティリーダーの育成を一生懸命やったことがあります。

こうしたフィールドでの諸活動への学生の参画は、彼らに異文化理解と異文化交流の重要性を強く自覚させるものであったと私は確信しております。そして、こうした現場での活動は、利他的な行動が人間をいかに成長させるものであるかを、彼らに覚醒させる重要な契機となったようにさえ私は思います。

実際のところ、東日本大震災が起こりまして、私のゼミの学生がいち早く石巻市と釜石市での救済活動に乗り出したのですが、フィリピンやインドネシアのフィールドでの経験を持った学生たちが、救援活動のリーダーになっていたことを知らされて、私はフィールドでの研修がいかに大事であるかを後日あらためて強く悟らされました。

人間とは元来が利己的な存在です。しかし私どもは利己的であると同時に利他的、つまり自分以外の他の何者か、自分を超える他の何者かのために生きる存在でもなければなりません。自分の私的な利益のためだけに生きていては、決して誇りと幸福を手にすることはできないのだと思います。そういう経験を持った若い諸君の顔を見ながら、私は強くそう思います。

自分以外の何者かのために働き、生き、共同体や社会や国家のために献身する。そういう精神のうえに真のグローバリズムが生まれるのであります。最後は少し言葉を飾りすぎたような感じがいたしますが、長い教員としての経験から、私は強くそのような感情を持っていることを率直に申し上げた次第であります。

以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

（拍　手）

弘道シンポジウム 2016

グローバル化時代にどう向き合うか

●パネリスト

平川　祐弘　先生
東京大学名誉教授

田村　哲夫　先生
学校法人渋谷教育学園理事長

髙坂　節三　先生
（公財）日本漢字能力検定
協会代表理事会長

●コーディネーター

土田健次郎　先生
早稲田大学教授

土田　コーディネーターを務めさせていただきます土田です。今年の題目は「グローバル化時代にどう向き合うか」。いま、渡辺利夫先生にそのテーマに即したご講演をしていただきました。これから三人の先生に順番にまず十五分ずつお話をいただきまして、それが終わった後、三人の先生のお話を踏まえた上で、またお一人ずつの先生に、補足あるいはそれ以外のことも約五分間、お話しいただきたいと思っております。

それが終わりまして休憩に入りますが、その間に、質問用紙がございますので、ご質問がおありの方は、それに書いてお出しいただければと思います。それをもとにしまして、パネリストの先生方にいろいろとお話を賜ればという、そういう予定を考えております。

順番は、プログラムの順番でお話をいただきたいと思います。まず、平川祐弘先生。東京大学名誉教授で、いうまでもなく日本の比較文学の第一人者として、長年、多くの研究を発表され、また、新聞とか雑誌とか、それ以外の場所でも啓蒙的な活動も大変に旺盛に先生はこなされていらっしゃいます。

非常に国際的な先生で、フランスに留学され、そのフランスを足場にヨーロッパの各国にもさらに留学され、それで非常に幅広い言葉の学力をお持ちでいらっしゃいまして、文字どおり、大変にグローバルな方ですが、同時に日本文化に関する深いご造詣、それを踏まえた上で世界的な視野で日本というものを再把握される。そういうお話を伺えると期待しております。

平川先生の提言

平川　お集まりの皆さまは、グローバル化には賛成の方も反対の方もおられるかと思います。しかし、賛成しても反対してもグローバル化は、渡辺先生もお話しになられましたとおり進むであろうと、皆さん、うすうす感じていらっしゃるのではないでしょうか。

私は今からちょうど六十年前、フランスへ留学しましたが、当時は片道の旅費が日本人の平均収入の一年分に近い額でありました。そんな時代でしたから、私は五年間、日本へ一度も帰らなかっただけでなく、実は一度も電話をかけたこともありませんでした。

昨今来日する留学生で、国際電話をかけないほど貧しい人はめったにいません。しかし、一九五〇年代は交通費も電話代もそれだけ相対的に高かったわけです。

しかし、このように交通手段が発達したのは、結構なことばかりは申せません。難民の移動はそのうち日本にも降りかかってくる大問題かと思います。そのような重大問題を考慮せずに東南アジアから外国人労働者を日本に迎え入れることを主張される方は多少考え方が甘いのではないか。日本列島と違い、ヨーロッパは陸続きですから、難民の移動で今、大変です。

海が日本を守ってくれた。文化的にも政治的にも守ってくれたので、あれは地理的な僥倖というものです。しかしそれは過去の話で、ミサイルが飛んでくる可能性というか、ミサイルによって日本が恫喝される可能性は増大する。そうした勢力に迎合する日本人が、国内からも出てくるであろう。北朝鮮や中国が軍事大国化するのももちろん脅威ですが、北朝鮮や中国が内部崩壊したら、これもまた大変です。日本へ難民が逃げてくるだろう。そのとき、ドイツのメルケル首相のように、難民を受け入れると言えば、人道主義の皆さんは賛成するでしょうが、千人や万人や十万人の単位までならまだしも、それ以上は受け付けられない。それ以上を受け付けたら、日本国内が不安になる。難民を受け付けてくれる自治体がなくなるでしょう。日本でも難民は追い払えという国民運動が起きるかもしれない。

そんな政治運動が起こらないようにするためにも、大陸からお金持ちが飛行機で逃げてくるのは認めてもよいが、難民がボートピープルになって、大量に押し寄せてくるのは、海上で押しとどめなければならない。しかし、日本の海上保安庁には、それだけの自衛能力はないから、北九州や日本海沿岸地域は、騒然たることになるかと思います。

しかし、いまの日本では、このような非常事態を想定してはいけないように思考停止になっている。

暗い未来を想定しましたが、しかし、グローバル化はとにかく不可避である。大陸でもいまや、東シナ海を横断できる漁船を造る程度の技術は容易になりました。大陸から難民ないしは難民に仮装した武装勢力が日本に渡航してくるとして、その場合に考えられるのは、日本において極めて単純な、大国主義が盛んになることです。それは結構なことかというと、実はそうも言えません。

昭和時代前期の日本は、愛国主義が盛んで、新聞も軍部を支持しましたが、日本は大東亜戦争に突入して惨敗しました。その歴史を考えると、一国ナショナリズムの愚はやはり繰り返したくない。これが第一の結論です。

世界の中の日本を、私たちはもっと知らなければならな

い。内も外も知らなければならない。やはり渡辺先生が言われたように、知識を世界に求め、大いに皇基、インペリアル・ファウンデーション。「大いに皇基を振起すべし」という五箇条の御誓文は守るべきだと思います。それに比べると、教育勅語には国際主義のことが出ておりません。それだけやはり退歩したのだと私は思います。

それでは私たちはいま、グローバル化時代にどう向き合うか。次に具体的問題を国民教育として考えます。グローバル化時代にどう向き合うかという問題を考えますと、外国との接触が盛んになれば、日本に限らず、世界の各地で優等生は英語を一生懸命勉強するようになりました。もしかすると、英語の出来、不出来で、給料の差ができるような賃金体系が日本にもできるかもしれない。既に、東南アジアではそういう賃金体系はできています。

しかし、外国語熱心なあまり、学びの対象に憧れ一辺倒になり、自己の日本人性を喪失して外国本意の歴史観で日本を裁断されては困る。

日本人は外国語が下手ですが、相手の言うことに「イエス」「ウイウイ」「トエトエ」というのは非常に簡単でありまして、しかもそういうだけで自分は国際的に連帯していると思っている若い人は非常に多いわけです。

私の周辺には、フランスのことを勉強した人が大勢いましたが、フランスは大革命で王政を廃止したから、市民社会が出来上がった。日本も天皇制を廃止するがいい、などと主張し、外国をモデルにして、日本を批判なさる方が森有正先生をはじめ大勢いらっしゃいました。しかし、それでいいのか。

外国語を学ぶ際には、夏目漱石ではありませんが、やはり自己本位が大切で、彼を知り、おのれを知るというそのバランスが大切なんです。複眼の人こそエリートの理想であろうと思います。

外国を理想化して、日本を悪く言う、いわゆる「脳内白人化」してしまった日本人、そういう日本人でなく、世界に真に通用する日本人性を有するグローバル人材を養成するにはどうすればいいか。

地球社会のグローバル化に伴い、非英語国民の指導層は、母語のほかに二十一世紀の世界語である英語の習得が必須ですが、一本の足を自国の文化に、もう一本の足を外国の文化に下ろす二本足の人間であることが望ましいと思います。

日本は地球社会の中で、かなり大きな存在ではありますが、地球世界全体を見れば、日本は中心的存在ではありません。日本語は覇権的言語ではない。日本語は日本以外の国には通用しないという意味では、マイナーな言語なのです。日本人は地球社会で見れば、ローカルな存在なのです。地方の人間は、中央の言語を習わなければなりません。

実は日本人は明治維新のあとにも、地方の言葉と中央の

言葉と二つ習うことを余儀なくされました。たとえば鹿児島藩の人は、鹿児島では鹿児島弁で済んだが、中央に来たからには、東京弁というか、標準語を話さざるを得なかった。しかし、この場合は鹿児島弁も東京弁も同じ日本語ですから、地方の人が標準語を習うのは、それほど難しいことではなかった。

今日の世界の標準語は英語です。ところがたいていの西洋人にとって、英語を習うことはさほど難しいことではない。ドイツ人が英語を習うのは、鹿児島人が標準語を習う程度、それよりは少し難しい程度であった。だからドイツ人は、どんどん英語がうまくなる。

しかし、日本語はインド・ヨーロピアン系統の言語でないから、明治の地方人が標準語を学んだように、世界の標準語である英語を気楽に使いこなせるかというと、それはなかなか難しい。要するに日本は、グローバル社会では言語的にも不利な立場にある国なのです。

しかし、だからといって日本がグローバル社会から脱退するわけにはいかない。国際連盟から脱退したとき、松岡洋右全権は、日本のナショナリストから、拍手喝采で迎えられたのかもしれませんが、それが国を誤りました。

そこで、日本の言語文化の歴史について振り返ります。実は明治以前にも日本は世界の標準語と日本語の二つを習っていました。日本は明治維新まで、千年以上も、中国を中心とする東アジア世界の中で暮らしていた。そのとき士族階級が中心になって、第一外国語である漢文を一生懸命勉強した。

皆さまは、漢文は中国語と違うとお感じですが、英語でいえば、漢文も中国語も共にチャイニーズです。江戸時代でもそういう教養努力を重ねたのだから、これからの日本も、少なくとも知的階級は、日本文化とともに世界の中心文化にも通じるようにしたい。私どもは学問的にもナショナルな一国一言語の枠組みにとらわれていては駄目だと思います。その際、なにが一番問題になるかというと、問題は日本的教養と外国語能力を、限られたこの人生の時間内で同時に身につけるのはどうすればよいかという時間配分です。

語学教育は外部の英語教室等に委託するのがいいという考えも一つのやり方かもしれないが、私は日本の大学でも社会・法学・経済・歴史などの授業は外人教授を採用して外国語で教えさせればよいと思う。

私は、そこで外国語教育の現場に長年携わったものとして、リアリズムの立場に立脚した提案をいたします。

それはなにかというと、日本人に平等に英語を教えているような現在の体制では、日本は国際的に立ち後れるということです。

「好きこそものの上手なれ」ですから、子どもに英語を

習いたいか、野球をやりたいか、それで選ばせる。英語の特別学級は、理科も数学も歴史も地理も、小学生のときから外国人教師が英語で教えるというクラスをつくるようにしなければ、新渡戸のような人材は絶対育ちません。もっとも彼の『武士道』は気張っているところは欠点だと思います。

新渡戸は実は日本のことはあまり知らなかった。それから、岡倉天心も日本でずっと育ちましたが、横浜へ出てきて、そこで宣教師の塾で猛烈に勉強した。そうしなければ、国際社会で太刀打ちはできません。外国のことは理解しても、外国人がなにか言ったとき、即座で言い返せるだけの外国語能力がある人は、いまの日本の外交官にも極めて少ない。

だから、日本人の慰安婦二十万とかいわれても、言い返すこともできない。言い返すことができないから、相手の立場にいいようなことを逆に言う。そういう怠慢が生じているわけです。ベネディクトなどという日本について無知な学者に、日本は恥の文化だから罪の文化の西洋よりも劣るといわれても言い返すこともできない。逆にベネディクトをほめるような日本人教授が出たりする。

カナダという国はバイリンガルだといいますが、それはあくまで建前であって、英語を話す大部分のカナダ人のフランス語の能力は、極めて低いものです。それでは、英語を話すカナダ人で、カナダの指導者になろうとする人の教育はどうするかというと、子どものときから全面的にフランス語漬けにする。小学校のときから地理も数学も歴史も、フランス語で教えるクラスに入れてしまうのです。英語とフランス語のように似た言語でさえも、そうしなければ、バイリンガルでものにはなりません。

日本の場合、現在の教員で可能で能率的な教育はなにか。まず、一番簡単にできることは、日本で飛び級を認めれば、第二外国語を習う年齢が少し早くなりますから、前よりはよくなる。世界の大国で飛び級を認めていない国は日本だけです。

東京大学では、外国の学校から帰ってきた帰国子女を入れるようにしました。そうすると、外国では飛び級をした人がいる。そうした人たちだけは、いまでも東大で、一つ年齢が若くても入るようにしています。その制度をもっとひろげるがいい。

そうしますと、日本の場合、どういう教育をすれば一石二鳥になるかというと、優れた高等学校では、『源氏物語』は少し難しいが、『枕草子』とか、そういう原文をウェイリーの英訳と照らし合わせて読む。そういう式の教育を開発するのは、これは現在の日本でも文科省がよけいな取り締まりをしなければ可能です。

ウェイリーは東洋の森鴎外に比すべき西洋の大翻訳家で、Tale of Genjiを読むと、平安朝の文化とともに、二十世

紀初頭のロンドンの上流社会の文化も、その洗練された英語を通じて感じることができます。それというのはウェイリーの英訳『源氏物語』は二十世紀のもっとも見事な英語芸術作品の一つであるからです。

この種の教育法の開発には、自己の母なる日本語の言語文化にも、外国の言語文化にも、一本ずつ足を下ろした二本足の外国語教師、それを自覚的に養成する必要があるのだろうと思います。

徳川時代のエリートは、新井白石のように漢文のみか和文にも通じていました。過渡期に生きた森鴎外や夏目漱石は、和漢洋の知識を血肉化していた。日本人が精神の豊かさを取り戻すには、そのような一石二鳥の教育を広く推進せねばなりません。

英語より『論語』の主張もございましたが、孔子も実は漢文訓読体と英訳とあわせて教えるといい。中村正直は明治の初年、帝国大学で『論語』を読むときに、ジェームズ・レッグの英訳と一緒に読んだそうですが、そういう教育をするといいかと思います。

私は、英語よりも『論語』という藤原正彦説には賛成せず、論語も漢文訓読体と英訳と同時に教えると一石二鳥で教育効果も上がると思います。しかし、漢文訓読体だからこそ、訴えるのでだらだらした口語訳で教えても『論語』の有難味は感じられない。

そういう言語教育が大切で、道徳教育はその次にくるべきものだと思います。

源氏はウェイリーの英訳で読んでも、英語芸術作品としてすばらしい。日本人としてのアイデンティティーを備えた洗練された世界人の養成には、選ばれた才媛や英才に、日英両語で紫式部を読ませる。そういう授業が高等学校でもあっていいのではないでしょうか。そういう授業をやると、きっとおもしろくなると思います。

私は今、荻窪の読売カルチャーでこの授業をして十年になりますが、教養科目というのはたいてい長く続かないのですが、私のところはきちんと十年続いている。それは、紫式部の作品がよくて、ウェイリーの英訳がいいからなんです。おそらく先生もいいからだろうと思いますけれども(笑)。

その辺で話を終わらせていただきます。

土田　どうもありがとうございました。

テーマに即して含蓄が深く、しかも極めて明晰なお話をいただきました。要約するのも時間の無駄だという気が私はするので、もうそういうことはいたしません。

次は田村哲夫先生にお願いします。先生は渋谷教育学園の理事長。この学園には渋谷教育学園幕張中高と渋谷教育学園渋谷中高という学校がありますが、どれも大変な進学校です。しかも大昔からの伝統的な進学校とは別に、どん

どん力をつけてきた比較的新しい学校です。私が知っている限りだと、東大に入りさえすればいいやというのではない、生徒諸君に自分で調べさせ、自分で学ぶことを求めるというような明確な教育理念を持った学校です。

この学園以外にも、大学にも関係され、さらに公共あるいは国の教育関係の各種の委員も数多く、なされています。

平川先生がずっと大学で、いわば高等教育の場で大変ご活躍されたのに対し、田村先生はそれと共に、中学・高校のことを中等教育と申しますが、そこで大変な実績もある方なので、おそらくそういうことも含めた国際化のお話も出るのではないかと期待しております。

田村先生の提言

田村　ありがとうございます。大変ご懇篤なご紹介をいただいて恐縮しております。

私は校長として、実は自分でつくった学校で、四〇年ぐらいやっているのですが、その学校は、今ご紹介いただきましたが、ちょっと変わった学校で、二つつくったのですが、つくった以上は死ぬまで校長をやるかと。もうそろそろいいかなと思っていますが、校長も兼ねています。

二つの学校でだいたい、東京大学に、あわせると毎年一〇〇人ぐらい入るんです。ことしは七六と三〇ですから、一〇六ですか。

東大といえば入試は漢文をちゃんとやっています。これは大変な見識だなと、私は前から思っているのですが、なんとほかの大学は、早稲田のような大学でも漢文をおやりにならない。慶應はなんと中国古典の講座すらありません。これは、福澤諭吉が『論語』が大嫌いだったらしいですね。それの伝統を守っておられるのです（笑）。しかし、それはそれとしまして、生徒が頑張っている結果は出ていますが、学校の特色としては、そういったことよりむしろ、実は高校を出てから、直接アメリカの大学に進学する生徒が両方の学校共に毎年二桁、十人以上いるわけです。そのことが非常に、ある意味では特色というか、評価されているというか、そのような学校です。

人間が成長することをいろいろ手助けしていくという教育の役割でいうと、人間の成長期に大きな機会が二回あります。最初はご存じと思いますが、幼稚園の四～五歳のころです。昔はこれを反抗期といっていましたが、今は自立期といっています。第一次自立期ですね。二回目がもっと重要な時期で、これが実は中学二年、三年のころです。こ

れは第二次反抗期といったり、自立期といっています。

今は認知科学という学問が非常に進んできまして、きちんと理解されている。その時期は教育にとっては非常に重要な機会だと云われています。先ほど渡辺先生も、大学へ入ってからなるべく早く国際化をやったほうがいいとおっしゃっていましたが、私にいわせると、それは少し手遅れだと。少なくとも中学、高校ぐらいからやっていないといけないのではないかなと、率直に感じとして持っております。

自立期がどうして重要かというと、いわゆる人間の持つ能力としての認識という機能がありますが、その認識が、思春期性差を経験することによって、飛躍的に変わっていくと考えられています。性が違うということで、人間は自分のことをよく考えるようになるんです。それがきっかけになって、認識は高度に発達して、認知科学の人にいわせると、いわゆるメタ認識ということが可能になってくる。これは、中学の後半から高等学校時代に、そのメタ認識の能力を持ってくるわけです。

そのメタ認識というのはどういう意味かというと、認識というのは、宇宙でいろいろ事件が起きるわけですが、それを概念として自分の頭の中に取り入れる作業をいいます。そのなかで、どれが自分にとって意味がある、どれが自分にとって大切か、どれが自分にとって役に立つのかというのを区分けして取り入れる。それをメタ認識というのだそうです。それは性差認識と引き続いて起きると考えられていますので、実はその時期がとても大事なんです。ですから、中高のある時点から、意識的にその点については指摘をしていく必要があるだろうと思います。

先ほどの渡辺先生も平川先生も実はそれに触れておられるのですが、国際化、グローバルということに対する意識は、基本的に基礎になるのは、好きかどうかということだろうと思うんです。なんとなく好き。そのなんとなく好きということの典型が愛国心だといわれています。人間の能力の認識の働きで分類していえば、それを情動と説明しています。この情動が形になるのは、中学・高校のその時期なんだと考えています。

私はそういうふうになんとなく考えて共学の中高一貫の学校を一九八〇年代から、千葉と東京につくって、東京のほうが一〇年後れていましたから、千葉が三〇年、東京で二〇年、こういう活動をしてまいりました。

結果としては、生徒はかなり、国際社会になる、グローバル化されるという、自分たちがこれから生きる時代を予測して、そのための活動、教育活動に参加することを熱心にやってくれていますので、それなりの成果が上がってきているのではないかなと思っております。

時間が限られていますから、あまり長くご説明はできな

いのですが、いくつかの国で、これから先の日本の道徳教育で考えるとすれば、世界の中で選ぶとすれば、やはりフランスかと考えています。平川先生のような専門家を隣にしていうのは大変申し訳ないのですが、先生がいないものとして説明します。

ご存じと思うのですが、フランスという国には、フランス国民はいるけれど、フランス人はいないという有名な標語があるんです。人工的につくった国です。まさにグローバル社会、これからの人間関係を考えるときには、フランスで努力していることはすごく意味があるし、参考になるんですね。

フランスで今、道徳教育で一番苦労しているのは、ライシテの原則です。この原則は一六四八年、ウェストファリア条約で近代国家がつくられたときに、フランス人が工夫して、宗教を排除する形で国家を形成していったという歴史の流れの中でつくられてきた考え方。これがまた、実はグローバル化がもっと進んだために、えらい苦労のたねとなっているわけです。

ライシテの原則は宗教を公の場、たとえば教育の場から外すという原則です。これは実は、道徳教育には大変な問題を起こすわけです。ライシテの原則を教育の場に適用することでフランスでは一斉に二〇一五年から全国で「道徳教育」が実施されています。「成熟社会において、批判精神をどう養うか」がテーマとなっています。そしてこれがイスラム教との摩擦になっているのです。

私は道徳教育と意識して、校長講話を中学・高校の生徒たちにしています。学年ごとに全校生徒に年間でだいたい三五時間、六学年ありますから、その六倍。それと、生徒自身にいろいろな、私が提案した話について論文を提出させたりしています。

そのなかで私が気にしている考え方は、言葉でいいますと、人間の行動というのをコントロールして、それを突き動かしているものは、心の中に出てくる欲望だと、ディザイアだと。これはとても大事なんだと。それがなければ、人間は活動しませんから。しかし、それを自由にさせてしまったら、これは大変なことになる。それぞれが勝手なことをしだすわけにいかない。

それを制限するのはどうしたらいいか。そのやり方としては、宗教はそれぞれの人の心の中に問いかけて、内的に自分で欲望をコントロールする。そういう仕組みを宗教は発明しているわけです。

大きな流れとしては、中国の論語の流れがあります。それから、インドの仏教の流れがあります。それから、ソクラテスをはじめとするギリシャ文化の流れがあります。このギリシャ文化の流れが、思想的には人間が生きているということは、神との契約、契約書、コミットメントという

のですか、この契約を守って生きると、神はすばらしいプレゼントをしてくれるよというこの思想。これはキリスト教にもイスラム教にもあるわけですが、その宗教の思想が道徳教育の根幹だと私は思っています。

だからそこを、中高の六年間で解説しながら、比較的に分からせて、それぞれが選びなさい、考え方をつくっていきなさい。目的は自分の欲望の内的な自分自身によるコントロールする力、統制力。これをどのようにつくっていくか。これで人生の幸福、先ほど、渡辺先生がおっしゃった、いい言葉だなと思って聞いていたのですが、誇りと幸福感。これがそのことによって身につくというような話をしてきているのですが、それが私のやってきた道徳教育の中味です。

中一から高三までの校長講話の流れは、認知科学の知見をふまえて人間の発達段階を考え、テーマを決めて、レジュメをつくってやっているのですが、これが私にとっての道徳教育の中味だと考えているところです。

大変アバウトな話で分かりにくいのではないかという気もしますが、目的はやはり多様性を認め、そして、寛容な人間をつくり出すという、多様性に対する寛容な人間をつくり出す。これが私の道徳教育の根幹の考えです。

最後に申し上げますと、日本の国が教育を、国際化を意識して進めなければいけないということで動き出した時期が一九八〇年代です。八二年に例のエズラ・ボーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が出されまして、日本が世界を意識しだしました。

日本人はばかではないなとつくづく思うのですが、その時期に臨時教育審議会ができ、日本の教育を国際化にあわせて改革をしていかなければいけないということを、提案しています。

しかし、これから先を考えると、この流れをもう少し加速していかないといけない。非常に難しいテーマではありますが、加速していかなければならない。その際に道徳教育はそのなかの一つに入ってくる。グローバル社会における道徳教育はどうあるか、これを教育にどう生かすかというのは、私が現在やりつつある課題だと考えているところです。

土田　どうもありがとうございます。

中学校、高等学校の教育の実践を通しての大変重みのあるお話を承りました。国際化の問題と共に道徳の問題についても、非常に示唆的なお話をいただいたように思います。

続きまして、高坂節三先生にお願いいたします。高坂先生は、本会の理事でもありますので、皆さまはよくご存じだと思います。紹介の文章にも先生のプロフィールが書いてございますが、いくつもの大企業で取締役を歴任、経済同友会で幹事を務められるなど経済畑の第一線でずっと活動されていらっしゃいます。ただ、教育関係にもいろいろ

な形で、ご貢献されていまして、今は、日本漢字能力検定協会の代表理事会長、そういう非常に文化的なお仕事も精力的になさっています。

高坂先生は哲学の高坂正顕先生のご子息、国際政治学の高坂正堯先生のご令弟であられ、学者のご家庭に育たれたので、単に経済だけというのでなくて、文化的な背景を持った稀有の経済人だと私は認識しております。

平川先生、田村先生からは学問、教育、そして今度は高坂先生からは、それを踏まえて経済とか、そういうことも含めたお話をしていただけるのではないかと期待しております。先生、よろしくお願いします。

高坂先生の提言

高坂　ご紹介にあずかりました高坂です。今の教育の話については、お二方のご意見に全面的に賛成です。

グローバリゼーションですが、もう既にグローバリゼーションということはどういうことか、渡辺先生をはじめ、皆さんがおっしゃっていますが、グローバリゼーションというのがどうして始まったかということになると、やはり私は大航海時代から始まったのだろうと。つまり、バスコ・ダ・ガマが喜望峰を見つけて、インドへ行った。コロンブスがアメリカ大陸を発見した。そこで、マゼランが世界一周に成功した。このときに初めてグローバルな世界というものをみんなが認識したんだろうと思います。

もう四十数年前ですが、私は、このマゼランが通ったマゼラン海峡を渡ったことがあります。真夜中に渡るのですが、非常に潮の流れが速くて、向かうところにまっすぐには行けなかったんです。おそらく三〇度か四〇度くらい東を向いて船は乗り出します。そして真ん中辺でこの波に押されて、ちょうど対岸に着く。そういう経験があります。

そのときになんにもないところにあったのが野火なんですね。火柱がボーボーボーと。というのは、マゼラン海峡を渡る反対側は、火の島とか、ティエラ・デル・フィエゴといわれています。石油の出るカスピ海沿岸から拝火教が生まれたのもこうした風景からではないかと思いました。

マゼランは五艘の船で乗り出しましたけれども、やっと一艘だけがヨーロッパへたどり着く。

二百五十何名の乗組員で、帰ったのはたしか一八名だったと思います。ああいう苦労があって、怖がって帰る人がいるのが当然な中で、マゼランが世界一周をして、このとおり地球は丸いんだと、グローバルなんだということを世

界に知らしめる。

その後はもうご存じのように、イギリスから清教徒がアメリカへ行ったり、スペイン人やポルトガル人が南米へ行って、鉱山を開発したり、農業を開発したり、そこに黒人の奴隷を迎え入れたり、いろいろなことがありました。

そして、一九世紀の後半から二〇世紀の初めにかけて、この四〇年ぐらいの間に三千万人の人がそういう新大陸へ移っていった。その三千万人のうちの二千万人がアメリカ大陸へ行き、あるいは西部開拓のために尽くしたり、あるいは中国人を苦力（クーリー）として雇ったり、黒人も入ってきた。

ですけれども、その「人・モノ・金」の中の「人」は、第一次世界大戦前までに、飽和状態になった。それが移民反対のアメリカでの運動であり、日本人もそれのターゲットにされた。ですから、第一次の飽和状態というのは、この時期、二〇世紀の前半に起こり、その後、大恐慌時代を経て、第二次世界大戦、先ほど、渡辺先生がおっしゃったような状況になったわけです。

少しもとへ戻しますと、マゼランが世界を一周したあと、ポルトガルとスペインが世界を制覇しようとして、そこで話し合いをしてできたのが、一四九四年の有名なトルデシリャス条約なんです。世界を真っ二つに分けて、片方をポルトガル、片方はスペインの領土にしようという。

こういうことはやはりグローバルな概念が、この時期に出てきたのだと思いますが、第二次世界大戦のあと、国際連合もできました。そして、ＩＭＦも世銀もでき、それからＧＡＴＴとかＷＴＯのルールができました。

このときに、多少こじつけですけれども、アメリカを中心とする西欧と、ソ連邦を中心とする共産圏グループと、ここが世界を二つに分けた。大きさも中味も全然違いますけれども、トルデシリャス条約と似たようなことが、この時期に起こったと私は想定しております。

その間、アメリカ、西欧は非常な経済発展をします。しかし、ソ連邦は停滞をし、いずれ崩壊になっていきます。中国は毛沢東の指導の下に、共産主義でまったく発展がなかったわけです。ところが、ソ連邦が崩壊し、ベルリンの壁がなくなった。

それとほぼ同じ時期、一九七八年に鄧小平が改革開放を打ち出します。それ以降、中国は、急速に拡大してきたことはご存じのとおりだと思いますし、そのときのルールがいわゆるグローバリゼーションの最も華であった。非常に急速に伸びていった。私は七八年の中国へ、改革開放の直後に行きました。それ以来、四〇回ぐらい、中国へ行っていますが、もう目を見張るばかりの発展です。

当初、中国の人たちの国民所得と日本の国民所得は、一対三〇だったんです。それがおそらくいま、一対三か四に

なっている。急速に変わっていきますから分かりませんが、そう思われます。

それではどういうことになったか。いろいろなものを日本が輸出をし、技術指導をして発展に寄与してきたと思いますが、非常に分かりやすいのはユニクロです。ユニクロは、最初はあちらで縫製をして持って帰って、財をなした。

私のおりました伊藤忠でも、繊維の縫製は中国で大々的にやっていました。ところが、四年前、ミャンマーに一度行きました。そうしたら伊藤忠は、ミャンマーで既に縫製事業を中国から半分は移したというのです。なぜか。中国とミャンマーとの人件費は、一対三〇だというのです。ということは、中国はここまで発展してきましたが、そういったビジネスはだんだんやっていけなくなる。

このあと、中国がどう発展するか、私は分かりませんが、中進国のワナになるのか、それを突き抜けてどんどん発展していくのか、今は正念場だろうと思います。ここは渡辺先生のほうがご専門なので、なにも申しません。世界の状態としては、そういう意味で、発展途上国にどんどん技術も移っていくし、そういったところの生活水準が上がっていく。

ということは、日本からそういった、今まで開発されたようなもので勝負をしようと思えば、自らが海外に進出するか、あるいはそうでなければ、まったく新しいものをつくり出さない限り、日本の生きていく道はないのだろうと思います。

ですから、海外に出て行くためには、先生方がおっしゃったような人材をつくっていって、そこで仕事をせざるを得ないと思います。多文化の理解が必要になってくるのはいうまでもありませんし、そのための知識、しかし、その前に渡辺先生もおっしゃったように、日本人としての心構えというか、魂がなければならない。そういうふうには思っております。ですから、今後、日本が進むべき道としては、海外に積極的に出て行って、そこで指導者となって、そういう国のレベルを上げるということは一つだと思います。

同時に、よく言われています少子高齢化。これは日本にとっては大問題。先ほど、平川先生がおっしゃいましたけれども、移民をどうするのか。そこで、もう一五年ぐらい前ですが、経済同友会の有志で研究会を開きました。そのときに提言したのは、「訪れたい、学びたい、働きたい、日本へ」という題で、答申をいたしました。経済同友会でも一五年前は、そういったことに対する反応があまりなかった。今も正直いってあまりありません。

ただ、「訪れたい」に関していえば、当時はおそらく四百万人ぐらいしか一年に日本へ来なかったのが、今、二千万で、そのうち四千万にするというぐらい、意識的には変わってきたと思います。

「学びたい」については、あるいは日本政府としても、受け入れを一生懸命推奨しているにもかかわらず、本当に優秀な学生が来ているのかどうか。私はよく分かりませんが、専門の先生方がおられるので、むしろお伺いしたいけれども、どうも日本に来る生徒は、二次的な人。優秀な人はまずアメリカへ行くとか、ヨーロッパへ行く。そこに行けなかった人が日本へ来るとか、そういうことも聞きます。ですから、優秀な人材をいかに学生として受け入れるか。

ところが、その次の問題の「働きたい日本」というのは、本当に働きたいような仕組みができているのかどうか。それに関しては、いまの実情は非常に悲観的です。そして、日本の受け入れ政策というのは、あくまで労働力としてしか受け入れていない。人間として、そして、こちらで住んで、子どもを仮に産んだとしても、そういった家族を全部支えきれるような日本の組織になっていくのか。あるいは、そういう意識が日本人の中にあるのか。そういう点についていえば、私はアメリカや中南米でも生活しましたが、日本はそういうセンスに関していえば、非常に遅れているのではないか。そういったことを解決していかなければいけないのではないかと思っています。

土田　どうもありがとうございました。

経済や社会というような実際の場所、そういうところの現状を見通した、極めて示唆的なご指摘がいろいろあって、どこをこれから考えなければいけないのかということを非常に私は勉強いたしました。どうもありがとうございます。

それでは、先にも申しましたように、各先生方にいまの三先生のお話を聞いた上で、補足などがございましたら、あるいはもう一度強調したいことでも結構ですので、五分ずつお願いいたしたいと思います。

平川先生からお願いします。

補足発言

平川　グローバル時代には、一石二鳥の教育をしなければいけない。それは、歴史や文学でも同じであります。

先ほど、道徳教育についてお話がありましたが、フランスではどういう道徳教育をするかというと、小学校に入ったとき、なにを暗唱させるかというと、それはラ・フォンテーヌの寓話です。セミとアリの話を、うちの子どもも暗唱しました。

それは要するに、夏の間、セミは歌っていて、アリはせっせと働いて、えさを集めた。秋風が吹いて寒くなってきた。歌っていたセミは、なんにもエサを集めなかったから困った。アリさんのところへ行って助けを請うたら、あんた、夏の間なにをしていたのよ、歌って踊っていただけではないかと突き放されたということです。

人間はきちんと自分で身の回りの貯金をして、生活を立

てなければいけないという、これは大変な道徳教育でありまして、実はキリスト教の教えと少し違うんです。

日本で『イソップ物語』が翻訳されるとどうなるか。戦後、波多野勤子女史が解説を書いた『イソップ童話』がございます。

セミというのは、フランスにはセミがいますが、イギリスに行くとセミがいないんです。だから英語では、アリとキリギリスということになっています。日本も英語からの訳が多いから、キリギリスがえさをもらいに行くと、日本では気の毒ですねといって分けてあげるんです。

これが福祉の思想であります。これが日本の教育界を毒している疑似良心的な教えであります。こういうばかな教育をして、なにが道徳教育かと私は思っている。

フランスに外国人が入ってきて、それの子孫が結構、首相になっていますね。マンデス＝フランスという人は、ユダヤ人であった。近年もサルコジは移民の子どもです。

しかし、フランスに入ったからにはフランスに尽くしてしっかりという、そういう価値観を強制されるわけです。その一番いい例が、今までいろいろ悪いことをしてきてもその前歴は一切問わないから、外人部隊に入れ。それでフランスのために戦え。前歴は問わないけれども、死んだら三色旗で棺を覆って、フランスの墓に葬ってやる。

グローバリゼーションでなにが難しいかというと、それはそのような外国人労働者をも完全に使いこなす能力です。しかし日本人は甘いから、とてもそんなことができる人間ではない。日本というのは島国ですから、大陸からいろいろ文物は入れました。物は入れたけれど、人はあまり入れなかった。人も人数が少ないと、日本化せざるを得なかった。

しかし、今や交通手段が非常に便利になって、ある程度以上、ある人種の数が集まりますと、それはゲットーを構成する。その人たちは電話だけでなくて、いまや自分の国に帰るのもいたって簡単ですから、自分の国に簡単に帰れる。そういう人は、日本に同化しようなどとは思わないわけです。世界的にそういう状況になってきたから、世の中非常に変わってきた。

そういう人をも使いこなせる人材がグローバル人材ですが、だけど、キリギリスが物乞いをしたら、それにあげなさいという道徳教育をしている国では、そういうことは絶対実現しない。そういうことだけを申し上げておきます。

土田　それでは、田村先生、お願いします。

田村　先ほどは、フランスのことを申し上げたのですが、アメリカの例も少し申し上げてみたいと思います。

アメリカの道徳教育は、キャラクター・エデュケーションという言葉を使っています。キャラクター・エデュケーションの本を調べられると、すぐお分かりになりますが、

アメリカでは何十種類も出ています。この本はアメリカで一番売れているキャラクター・エデュケーション。これは要するに、幼稚園、小学校時代にやるわけです。

中味を見ますと、十いくつかの項目を挙げています。これはシティズンシップから始まって、コンパッションとかフェアネス、オネスティというテーマが出ていて、それについて個々にマンガチックな解説書がついて、どれもだいたい同じです。

ただこれはやはり確実にアメリカの人は身につけているなと思ったことがあります。

それは、私の学校の卒業生、四期生、今、日本マイクロソフトという大きな会社の社長をしています。彼がこの間、学校へ遊びに来て、いろいろな話をしているときに、君は、一生これは守る、これだけは人に譲らない、自分の信条のようなものはあるのかと聞いたら、少し考えて、「あります、インテグリティです」というのです。インテグリティだけはどんなことがあっても守ります。それは自分の信条ですと。

それは誰に聞いたのかといったら、お母さんから聞いたというのです。彼のお母さんはアメリカ人ですが、母親がそういうことを子どもに伝えている、それが影響しているんですね。

これは実は、グローバルな社会の中では、この手のことはすごく大事なんですね。つまり、どんな人間か、なにを話すか、なにを大事にしているかが分からないやつと一緒に商売するわけですから、なにか信条というか、これだけは大事にしたいというものを持っているやつは信頼できるわけです。その信頼があってこそ、信頼関係ができるわけです。

これからグローバルで活躍しようと思ったら、まずそのへんのところを。つまり、日本では道徳教育というと、道徳という言葉に変な垢がついてしまって、国のためとか、そういう戦争中の愛国心のようなことを思い起こしてしまいますので、過剰にマイナス反応が起きてしまう。これは若者の中にははっきりあります。

ですから、そういう言い方をしないで、私は高い倫理観とか、そんな言い方をして、これは大事だということを伝えているのです。とにかくとても大事なテーマだということはお互いに確認して、普及させていく必要があると思っているところです。

日本はやはりすごいなと思っていることがあります。ヨーロッパの難民を見ていますと、アジアはまだ起きていないのです。これは一九七〇年代に開発途上国に対する対応ということで、国連を中心にして、アフリカはヨーロッパがやれと、アジアは日本、そして中南米はアメリカだと、役割分担をしたんです。それを日本はえらくまじめに実施

したんです。経済は中国がものすごくよくなったし、アジア地域は経済成長をして。いま難民問題は、そんな大きな形では起きない。アメリカも、反米感情が強い中でなんとかやっている。メキシコの問題はありますが。

ところがヨーロッパは、顕著な対応ができなかったのではないかという気がします。EUのためではなかったかなと思っているのですが、自分のほうの問題を解決するのに一生懸命になってしまって、アフリカの問題がいまになってああいう形で出てきて、非常に苦しんでいるということだろうと思います。

先ほど、渡辺先生がおっしゃったように、利他的な行動ですね。結果的には利他的な行動が、グローバル社会では利己的な、自分が助かることにつながっていくんだということは、大事な要素なのではないかという気がします。

これはよく生徒に話すのですが、日本の文化はたいしたものだと思うのは、言葉なんです。日本の言葉。これは先ほどからちらちらと出ていましたが、江戸時代は三〇〇の藩があって、藩同士の話が通訳がないとつながらないくらい違っていたとよく聞かれています。これではまずいというので、一つの国の言葉として、東京の山手地方の言葉を標準語として決めて、日本人に広げていった。

これに非常に力があったのは夏目漱石だったのだろうと思うのですが、わが尊敬する東京大学の入試問題は、平川先生も覚えていらっしゃると思うのですが、私たちの世代の東大の国語の問題というのは、漱石の作品がほとんどだったのです。だから、漱石の作品さえ読んでおけばいいといわれたことを覚えています。標準語を国内に普及させるというのは、ものすごく意味があったのだろうと思います。

ただ、それは前提がありまして、実は一八世紀。契沖という万葉集の研究をした人、つまり日本人の文化を研究して成果を上げた人が、一七〇一年に亡くなっています。そのあと、お弟子さんの賀茂真淵が出てきて、賀茂真淵が万葉集の研究を完成し、そのあと、弟子に本居宣長が出てきて、『古事記』を研究しました。もうひとり有名なのが塙保己一です。『群書類従』という本を残してくれています。

一七〇一年に契沖が死んで、その一〇〇年後に本居宣長が死ぬんです。ですから、その一〇〇年間で、契沖、賀茂真淵、本居宣長、塙保己一といったこの四人で、日本の古典文学、いわゆる古典籍といわれ、国書ともいっていますが、国書の整理をきちんと仕上げているんです。それが次の明治のときに花開いていると私は思っているんです。

だから、日本はやはりそういう意味では文化的な歴史はたいしたものだと、クローデルが褒めたと言っているけれど、そういうことを言っているのだろうと思っています。

大事なのは、若い次の世代に文化をきちんと伝えること

です。伝える場は、私にしてみれば中等教育、中学・高校時代で、大学も大事ですが、率直にいって大学では少し手遅れではないかなと思っています。

土田　では、髙坂先生、お願いします。

髙坂　先ほど言い忘れたのですが、二〇〇八年ぐらいから、アメリカのピーターソン国際経済研究所の報告では、世界全体のＧＮＰ（国内総生産）の伸びよりも、貿易額が減っているんです。それまでは貿易額が引っ張ってきた。グローバリゼーションの成果がそういう形で起こっていたのが、二〇〇八年ぐらいに伸びが止まってしまった。

ということは、エマニュエル・トッドが言ったように、グローバリゼーションに世界が疲れてきた。あるいは言い方を変えれば、各々の国が内向きになってきた。そのことがそういう現象を起こしているんだと思うんです。

有名な社会学者でダニエル・ベルという人がいますが、国民国家は人間生活に関わる大きな問題には小さすぎる。しかし、人間生活に関わる小さな問題には大きすぎる。つまり、どっちつかずになっている。ということは、国民国家というものが、ずっと一九世紀から引っ張ってきた、この制度自身が疲れてきたというのか、その問題の解決をしなければいけない時期にきているのではないか。

それにつけて思い出しますのは、先ほど申し上げませんでしたが、環境問題です。環境問題は、一方では草の根のようなＮＧＯ。このＮＧＯの活躍が世界で認められたのは、一九九二年、リオで国連環境開発会議が行われました。世界中の首脳陣、ほかの国は全部トップが来たんですが、日本の宮沢首相は国会で、不信任案が出るということで出られなかった。

ちょうどそのとき、私はリオにおりましたので、よく知っていますが、リオの海岸縁にＮＧＯがずらっと出てきて、その力というものをみんなが認めてきた。おそらくこれが、世界的にＮＧＯが認められた最初だと思います。

ということは、ダニエル・ベルが言ったように、小さい問題に対して大きすぎるのですが、ＮＧＯというのがそういう意味ではできてきたんです。

では大きな問題、これもやはり今の環境問題を考えたら、本当に世界中が一つのルールでやっていけるのか。京都で九七年にＣＯＰ３ができました。そして、やっと昨年、ＣＯＰ21のパリ会議で、いちおう協定はできました。しかし、その協定自体が本当に機能するのかどうか。協定の発効は米中の合意と、そのあとのＥＵの批准で発効は決まりました。日本はまだしておりません。

これはあくまで自主的に自分たちは何年にはどのぐらいＣＯ２を削減するかということはいいましたけれど、それを全部足しても足りないであろうということがいわれていますし、本当にこの地球環境問題というのが世界的にうま

く統一できるのかどうか。もっと小さいところでいえば、EUというのは、ある意味でその解決のためにつくったのだろうと思いますが、イギリスが脱退して、これががたがたしている。

ですから、こういった問題についても、われわれはグローバリゼーションの中で、陰りが見えてきているグローバリゼーションをどうすればいいのかという意味では、非常に大きな問題をはらんでいるのだろうと思います。

土田　どうもありがとうございました。

それでは、ここで休憩を一〇分程度したいと思います。

（休憩）

質問に対する回答

土田　ご質問は合計十何枚あり、全てを取り上げると質問だけで一時間ぐらいいってしまうので、共通したテーマに絞らせていただきます。

なるべく先生方に広くお話を聞きたいと思います。最初のテーマですが、ここでもご質問が三〜四枚あるのが難民テーマでございまして、かなり長文のものがあるので、それを読むのを省かせていただきます。たとえば、北朝鮮、中国の今後の動向から見て、万一、難民が日本にやってくるときは、日本国民はどういう対処をしたらよいかというようなご質問とか、また、それに関係づけた内容で出ているものもございます。

また、せっかく先ほど基調講演をしていただいた渡辺利夫先生がいらっしゃっているので、アジアの現在の状況などについてご意見、あるいは見通しを最後に述べていただければと存じます。それではこれは全先生に一言ずつお願いしたいと思います。どういう切り口でも結構です。

平川　中国の現政権に近い人たちは非常な財産を持っていて、海外にも投資していますね。うちの近くのマンションなども所有者はどうも日本人ではないらしい。そういうことは世界各国でやっているわけです。

それは漢民族の知恵というものでありまして、私は向こうのほうで教えていまして、私は娘が三人いたのですが、一人くれないか。よく知りもしないくせに、いざというときに日本へ逃げたときの親戚にしようと、そういう魂胆が見え見えでありまして、賢い民族というのか、恐ろしい民族というか、われわれが考えていないようなことも考えるわけであります。

日本人は第二次世界大戦の前は外国の銀行に貯金などしている人はほとんどいませんでした。そういうことを考えますと、これはどちらかが知恵を先に働かせているだけという問題なのかもしれません。見通しが、向こうのほうが歴史が長くて、よくできている。

それで、私は中国で、先ほどの渡辺先生がおっしゃった

易姓革命。あれが起こらない保障はまったくないんです。貧富の格差が世界最大の国家でありますから、誰かが私は毛沢東のひ孫であると名乗って出て、それが軍部を引きつければ、クーデターも可能になるわけです。そうしたときに、文化大革命などを超える血で血を洗う闘争が始まれば、お金持ちはさっと飛行機でアメリカへ逃げる。それはきっと知能のＩＱによって逃げ方が違うのでしょうが、少し鈍い人はしばらくして日本へ飛行機で飛んでくる。もっと鈍い人は船で東シナ海を渡ってくる。漁船が尖閣諸島にたくさんやってくるのを見ても分かりますように、いまや航海技術は非常に発達しまして、五島列島のほうまで来るのは、遣唐使の時代と違って非常に容易です。

最初に誰が、どの内閣が対処するかで話は変わってしまうわけです。おそらく多くの日本の閣僚は、寛容であるとか、そういう教えを受けていらっしゃる方で、必ずしも政治的影響はないかもしれないから、いっぺん日本で、移民を、難民を入れたとする。大村の収容所あたりをきっと復活するのだろうと思いますが、いっぺんやると、あとからあとからやってくる。

いまのヨーロッパの場合も、最初にメルケル首相が、本人は東ドイツの出身で、東ドイツから西へ逃げた難民、その思い出がありますから、難民を救うのは人道主義だと思ってやったら、とうとうＥＵが分解するほどの難民問題になってしまった。だからこれは最初に誰が英断を下すか。

しかし、そのときにやはり、世論というものがあります。世論は必ずや、あの人たちはお気の毒だ、救ってやれということになって、それで日本は大騒動になるだろうというのが、私の見通しでございます。

田村　難民の問題はすごく難しい問題ですが、二つぐらい頭に浮かぶことがあります。一つは、アメリカの、先ほどお話になった、アメリカの移民問題が問題になった時代の話をさせていただきます。

それは第一次世界大戦で、アメリカに大量の移民が流入します。そのときの状況を、私が翻訳した『アメリカの反知性主義』という本があるのですが、そのなかで細かく書かれているので、よく覚えています。

当時、大量に流入した移民のために、アメリカは非常に困ったのです。調査すると、シカゴのような大都市で、家族で英語を話す家族が二割か三割、あとは違う国の言葉を話していたという実態があったことが報告されています。それはどういう問題を起こすかというと、まさに今日、問題になっている貧困と格差の拡大、そしてその再生産です。

アメリカはやはりたいしたものだと思っているのですが、そのときに政策として導入したのが教育改革です。これで貧困と格差の拡大と再生産を防ごうとしたわけです。具体的には、高等学校を世界で初めて無償にしたわけです。

結果、どんなことが起きたかというと、その後、高等学校卒業生が大量に増えたことで、アメリカの大学がものすごい競争になって、アメリカの世界一の大学群が完成していくわけです。

ですから、第一次世界大戦以前はアメリカの大学などはたいしたことはなくて、まさにヨーロッパの大学の真似（コピー）でしかなかったんですが、そういった環境に置かれてものすごくよくなって、今日、世界中の大学はトップはアメリカに占められてしまった。

移民問題、難民問題をどう捉えるかは、いろいろな切り口があるのだろうということの例で一つ申し上げました。

それからもう一つは、私が生徒にいつも言っているテーマがあります。それは、人類の、ホモサピエンスの歴史です。

ホモサピエンスというのは、二〇万年ぐらい昔に、アフリカのある場所で生まれたようだ。だいたい六万年ぐらい昔、そこから、ジャングルから平野に出ていった。平野に出ていったら、それは旧石器時代。人類が知恵を使って生きるという歴史のほとんどは旧石器時代だということです。そのときに人間の機能は形成されていくわけで、これはいろいろな機能に発展していくんだという説明をするのですが、要は、みんな同じだと。みんな、色の白いのも黒いのも黄色いのも、六万年ぐらいの間にいろいろできてきているけれども、全員同じホモサピエンスなんだ。違う種族ではないということを繰り返し伝えています。

ですから、ヘイトスピーチとかそういうことをいう人はおかしいのではないか。みんな同じなんだから、違うと考えるほうが間違い。六万年昔に戻れば、アフリカへつくわけですから、それはみんな同じだという。これはＤＮＡで分析されているわけですから、間違いなくそうなんだから、そういうふうに考えるようにしないと、科学的に生きていることにならんぞという話をしています。その二つぐらいでしょうね。

髙坂　難民ということになると、私も本当はよく分かりません。緒方貞子さんが難民については非常に見識がある活躍をされたと聞いていますし、今度、国連総長になるグテレスさんは、一〇年間、難民問題に取り組んでこられて、その実績も買われて、圧倒的多数で国連事務総長に選ばれたと聞いています。ああいう人がどういう知恵を出してくれるのか。ああいう人に対して、われわれもどういうふうにやっていくかというのは一つのポイントだろうと思います。

それと、先ほど私が申しましたように、「訪れたい、学びたい、働きたい日本」という概念でいきますと、一番難しいのが日本で働かせるのをどういう格好でやるのかということです。それは逆にいうと、移民をどう考えるかとい

うことで、実はその研究をしていたときに、『ニューズウイーク』にこういうのがあったんです。「The Japan That Can Say Yes」。この前に、石原慎太郎とソニーの盛田社長が『「NO」と言える日本』というのを書いて、非常に大きな問題になりました。そのとき私はニューヨークにいたのですが、それをもじって、イエスと言える日本。それでイミグレーションで、その国は外国のワーカーを必要としている。それを受けるのかどうかという題でこの特集をしたんです。

それが二〇〇〇年です。それから一六年たって、そのころとどれだけ変わったかというと、ほとんど変わっていない。多少受け入れをして、働かせて、三年たったら帰らせるとか、それから看護士などは、きちんとした試験が通ればいいというのだけれど、その試験が、厚労省がつくった試験は極めて難しいというか。そういうようないろいろなことがあるので、いま一概には言えませんが、ぼちぼちそういうことのブレーンストーミングというか、対応をしていかなければいけない時期にきているのではないか。これはうまくルールをつくって、それこそ優秀な人を取り入れることでもいいと思うんです。

この間、アメリカで二人の経済学者がノーベル賞をもらいました。それは、「アメリカ人」と報道されていますが、もとはやはりイギリス人だったと思います。イギリス人がアメリカへ帰化して、賞を取っている。そういうフレキシビリティがアメリカの中にはある。

私が北米で勤めていたときに、テキサス州にある関係会社の会長もしていまして、そこであるとき話をしていたら、工場を動かしているのは、ほとんどメキシコから来た人です。少し収入がよくなると、クリスマスに帰るといって、そのあと戻ってこない。そういう対応の中でどういう人をうまく引き留めるかというのも問題だし、どういう人を入れていくのかということも問題。そういうようなことは、日本であまり経験をしていないのではないか。

だから、少しずつでいいからルールをつくり、外国の人を入れ、そしてそういう人をうまく使う準備、訓練をしていく必要があるのではないか。難民が中国から何億とボッと来るというのは、それは別ですけれども、少しずつなら受け入れてもいい、そういう準備ができていれば。

ですから、一概には私は反対はしません。しかし、そのための心の準備をぼちぼちしていく必要があるのではないかと思います。

土田　それでは渡辺利夫先生にもコメントをいただきたいので、よろしくお願いいたします。

渡辺　思わぬご指名で、なにを申し上げていいか分からないのですが。

多くの日本人が、口に出してはいわないけれども、意識

下で恐れているのが、やはり中国経済の崩壊、それに伴う一党独裁体制という政治体制の崩壊。それによって生まれるであろう混乱と中国人の難民化。ひとたび発生すればスケールの違うものだと思うんです。その可能性についてなんですけれども、私はエコノミストですので、経済学者らしい一つの懸念を申し上げてみようと思います。

最近、私も中国の優秀なエコノミスト、アメリカに留学している中国のエコノミスト等ともつき合いがあるんですが、彼らの多くが中国研究をもうやりたくないと言い出しています。それはいったいどうしてなのかと話を聞きますと、ほぼ共通しているのが、こういう答えなんです。

中国の指導者はいまの中国経済が非常にゆがんだものであって、持続性の極めて薄いものであることはみんな分かっている。まっとうな指導者であれば、そんなことを知らないはずはない。しかし、それにもかかわらず、いまのやり方を続けていかざるを得ない。優秀なエコノミストがいくら優れたポリシー・プロポーザルを出しても、それを中国政府が受け入れる様子はまったくない。そんな状態ならば、私は中国経済研究をもう生涯の仕事にするなどということはやめた。こういうふうに言い出していることが非常に私には気になっています。

彼らの言いたいことを私の解釈で申し上げますと、こういうことなのだろうと思います。

中国は大国です。大国の経済を決定している変数はなんであるかといいますと、要するに投資と消費です。もちろん、輸出と輸入はありますけれども、大国であれば、輸出は輸入によって消し去られていくものですから、要するに大きな経済動向を決定するものは投資と消費です。

中国のいまのＧＤＰに占める投資率は、なんと四八％です。過去の先進世界の歴史的経験によれば、最高値を達成したのは日本と韓国です。いざなぎ景気のときの日本とオリンピック景気のときの韓国で、それは三九％です。これを超えた国はどこもありません。なんと中国は四八％。しかもそれがじわじわとまだ上り続けている。

投資というものは、投資だけで完結することはありません。投資は必ず最終消費になって、そして経済は一巡していくものです。これは当たり前のことです。投資が一方的に伸びるということはあり得ない。

ところが、中国の消費率は、なんとアメリカの半分。日本の三分の二くらい。投資率が四八％、ＧＤＰに占める家計消費の額が三六％、いままでの人類が経験したことのないような偏頗な経済です。

これでは当然、経済学では資本ストック調整がいずれ起こるはずです。だから、この経済はいかにもおかしい。そんな経済がおかしくないと思う指導者がいるはずはないわけです。ところが、指導者全員がおかしいと思っていなが

ら、分かっちゃいるけどやめられないというのが中国のいまの現状なんです。

どうしてかといいますと、既得権益なんです。中国の投資率を高水準に維持しているものはなにかといいますと、これはとんでもない超大型の国有企業なんです。『フォーチュン』という経済誌がありますが、世界売上高上位一〇〇社の中に入っている中国企業の数は、日本などの倍くらいはあります。世界トップテンの中にも三社入っているという超大型の企業です。

そういう企業の傘下に、一級企業、二級企業、三級企業とあるのですが、私が勘定したところ、二万何千社。これがオールマイティーの権益を握っています。そのトップマネジメントはみんな、党の関連する人が占めています。

中国の財政支出も金融も、そういうところに優先的に回っていますし、インフラストラクチャーの優先的な受注権も彼らが持っている。もうその既得権益構造を崩すことは誰にもできない。自分で自分の首を絞めるようなものです。もう一つ、地方政府というものがありますが、これは時間がないから、いまはやめておきます。

そこに現れているように、政治と経済、党指導部と経済が一体化して、それで自分で自分の首を絞めている。ですから、みんなおかしいと思っていながら、それを止めることができないという構図です。

四八％よりも高い資本蓄積は、いずれかの時期でこれは必ず破綻し、「山高ければ谷深し」という言葉がありますが、大きな谷に落ちこまないはずはありません。中国の鉄鋼生産の過剰量は、日本の鉄鋼生産量の六倍です。こんな途方もない余剰生産力を、そんなにいつまでも保つことが無理であることは当然のことです。

さて、難民問題ですが、こういった激しい資本ストック調整が起こったとき、平川先生がおっしゃったように、アッパーミドルから上の人たちは既に資産を世界中に分散しておりますし、子どもや親族まで外国に分散しておりまして、そういうときに逃げるチャンスはもう、完成したかどうか分かりませんけれども、すでに持っております。おっしゃったように逃げ遅れた人々が難民として発生する場合には、いまのヨーロッパのスケールとも違う。

日本の国民にとってはあまりに怖い話でして、怖い話というのはあまり意識化しない。ジャーナリストもあまり騒がない。ほんの一部のジャーナリスト以外は。けれども、この会のような日本の将来を憂う人々の集まっている会であれば、そういう可能性をも、リスキーな可能性をも、どこかに胸に置いておく必要があるのではないだろうかということで、多少エコノミストらしい話をさせてもらったつもりです。ありがとうございました。

土田　どうもありがとうございます。先生方のお話で、

難民に対する現実認識を持ち、それに対してもっと明確なビジョンなり、方式を考える時期にきているというのは、よく理解できたように思っています。

あと、いくつか教育関係の質問がございます。道徳教育とか、外国語教育の話です。道徳の方は質問の対象の先生が分散していますが、外国語教育は全員になっていますので、全先生にお聞きしたほうがいいと思います。

それから、たって平川先生に一つ。フランスでは子どもにラ・フォンテーヌの寓話を読ませるとのことですが、日本で子どもに読ませるような共通の本、物語はどんなものがあるでしょうか。

平川先生に最後の質問を最初に答えていただいて、あと外国語教育と道徳教育問題、両方を関連づけてもどちらでも結構ですので、お願いしたいと思います。よろしくお願いします。

平川　ラ・フォンテーヌの寓話を暗唱させるような、それに相当するものはどうでしょうか。私は日本でいいと思うのは百人一首ですね。ああいう遊びであり、意味は分からなくても子どものときに、私は「ももしきや」などというと、股引のことかと思っていましたが（笑）、ああいうのを覚えておくと、いつかまたよみがえるし、非常に優雅な遊びではないかと思います。

それから、私は戦争中に育ったのですが、小学校の担任の先生は、修身の時間に最初に教科書をちょっと読んで、あとは江戸川乱歩の『怪人二十面相』を朗読してくれて、それが楽しかったですね。

それから、昭和一六年に青森から出てきた先生が俳句が得意で、この先生も修身の時間、最初にちょっとだけ教科書を読んで、あとは俳句をつくらせるんです。五・七・五というので、私が「水たまり　紙が一枚　浮かんでる」といったら、それも褒めてくださったんです。それで、作文とか俳句、そういう教育はよかったですね。

日本の学校教育でおもしろいと思うのは、皆さんにも先ほどいろいろ感想を書いていただきました。書いていただくと、これは非常にいいんです。大学紛争のころなどは、大きな声で発言する人がいると、そういう人がクラスを制しますが、本当の感情は書いて出す。そういうところにあるのではないかと思います。

それで外国語教育ですが、日本人は家庭で食事のときに親子がよく話をしない家庭が多い。というか、そういうところで口を聞いてはいけないなどという教育も、これは韓半島はそうですが。そういうのだと日本語でも会話がうまくない人が外国語で会話がうまいはずはない。

アメリカの教育とはなにかといいますと、アメリカは移民から成り立っていますから、みんなそれぞれ分かりきった前提からきちんと説明するんです。日本ですと、分かり

きっていることを聞いたりすると、みんなが笑うという、アメリカはそこは違うんです。そうすると、小学校でも中学でも大学でも、質問するかしないかで成績が決まるんです。

そうすると、大学でどういう人が質問をするかというと、よく調べてこなかった人が勝手に質問するので、だから、江藤淳がプリンストンで教えて、それから日本へ帰って初めて成城大学の非常勤講師になって、日本だから教えるのはさぞかし楽だろうと思ったら、九〇分間、ずっと話していなくてはならなくて、大変だったと言っていました。だから、英会話や外国語教育も、そういうふうに日本の文化と離れては難しいのではないかと思います。

それから、先ほど、竹山道雄の名前が出まして、実は私の家内は竹山の娘なものですから。なんで竹山道雄が昭和一五年にナチスドイツ批判の大論文を岩波書店の『思想』に発表できたかというと、竹山道雄は昭和初年にドイツへ留学しましたが、ドイツだけでなくて、フランスへも行っていたのです。フランスから見ると、ナチスドイツの悪いことはフランスの新聞にはよく出るわけです。

片山敏彦も、竹山がパリで知り合って、一高の教授に呼びました。そうすると、いまの日本では片山敏彦はロマン・ロランの翻訳者とかで知られていますが、あの人は実はドイツ語の教師であったわけです。

そういうふうに複数の外国語ができる人は、一辺倒にならないんです。大島浩という駐独大使は、父親の代からドイツに傾倒した陸軍の軍人さんで、自分が打込んだ研究対象国を理想化した。そんなドイツ・スクールの大島大使が三国同盟に日本を引き込んだのですが、あのころのドイツ語の先生方は、やはりヒトラーが出てくると、ドイツが強いと皆さんドイツびいきになるんです。ちょうど戦後、中国語の先生が毛沢東万歳と愚かなことを言って、いま私が「愚かなことを言って」などと言うと、大変叱られるわけですが、そういうプロ・チャイナの人たちで占められていました。

世の中には教育屋とでも称すべき人たちがおられますが、そうした知的インテグリティのない人たちがかえって人道主義的な立場を主張して、難民は受け入れなさいとか、そういう甘いことを言ったり教育したり、新聞に書かせたりする。それがいまの日本の病弊だろうと私は思います。

田村　私は生徒にもよく話すのですが、日本の教育を考えた場合、江戸時代の藩校教育とか寺子屋教育を参考にすると分かりやすいのですが、あの時代の教育というのは、今になってみると教養といわれるものと修養といわれるものが歴然と分かれていた時代だったのではないかという気がします。

いわゆる町民が習っている教育は、中味が修養といわれ

るいわゆる読み書きそろばん、これが中核になっている。こういうことが非常に普及して、これは世界にも自慢ができるようなレベルを維持した原因です。

同時に、武士階級が中心だったらしいのですが、教養といわれる教育もきちんと行われていた。これは武士の場合には、いわゆる儒教の教育ですね。

儒教といっても、私も生徒に話をするのでいろいろ調べるのですが、孔子様がおっしゃっていた考え方がそのまま今日に伝わっているわけではなくて、中味については非常に変化しています。日本人はかなり勝手にそれを変えてきている歴史があります。

中国の中でどう変わっているかというと、三回ぐらい変わっているんです。明らかに朱子のときには変わっているのですが、現代に至る時代でも、清とか、明も少し変わりますが、そのころになると明らかにヨーロッパのいわゆるキリスト教思想といいましょうか。ギリシャ哲学の影響を中国も受けて、儒教の中味が大きく変化していることが感じられます。これはその方面の研究者に聞くと、なるほどなと納得することが多いのですが。

私たち日本人は、その教養というものが儒教、つまり変化をして、多少なりともヨーロッパ的な思想に影響を受けた儒教を受け取っています。

新渡戸稲造の『武士道』という本は、デンマークの牧師さんかなにかから、日本人は経済のことばかりやっていて、ちっとも精神的なものがない、非常に下劣な民族だというような類いの悪口を言われた。それに発憤して書いたといわれています。

その際に彼は、『武士道』の中味は目次に出ているように、武士の階級の道徳教育とはっきり明示しています。武士の階級の道徳教育と明示をした中味の徳目を調べてみると、明らかに儒教が述べている個人の徳目と違うんです。日本的なものになっています。とてもおもしろいことです。

一番違うのは、たとえば克己とか勇気というのは中国のほうにはないんです。日本にはあるんですね。これは武士だということでその部分が強調されているのかもしれません。大事なことは、日本的であると同時に、それがそのまま私たちの精神構造の明治時代から伝わってきた中核にあるんだということを知っておく必要があるという意味で紹介したわけです。

実は、この『武士道』と『代表的日本人』と、平川先生はあまりお褒めにならないのですが、それはそれとして、やはり『茶の本』ですね。この三つの本は、私は自分の校長講話では、中学時代に読んでおこうよと薦める本です。

基本的には明治のときに、ちょうど外国文化とぶつかったときに、日本の文化を紹介したいという情熱を持って書かれた本。そしてそれは全部英語で書かれて、評判がいい

ので日本語になった本です。

これは、いま参考にして見ておく必要があるのではないかなと思って、それはできれば中学時代に体験させたいと思って、この三冊のうち一冊は必ず目を通しなさいよという話をしているんです。この三冊の本を、ある意味ではきちんと伝えておく必要があると思います。

道徳教育の話をしますと、ついでにいうのはルース・ベネディクトの『菊と刀』です。私はこれをまさに、東大法学部の民法の最初の時間。川島武宜という法社会学の大先生ですが、彼が一時間目に民法の話をなにもしないでこの『菊と刀』の話ばかりずっとしていましたから、ものすごく印象的でした。

でも、これもよく研究してみると、かなり誤解があるんですね。ルース・ベネディクトの誤解がずいぶんあります。ですから、日本人の恥の文化、罪の文化というのは簡単なことで割り切れないものが日本の文化にはあることを生徒によく伝えているのですが、象徴的な意味では説明しやすい。ちょうど戦争に負けた直後だから、川島先生がやられてしまったのではないかなと、いまは思っています。

とにかく非常に複雑で、しかも非常に重要なことをわれわれは次の世代にきちんと伝えていく必要がある。中高大という連続した教育の中できちんと伝えていくという、これはとても重要なこと。

あえていえばこれは道徳教育になるんですね。だけど、道徳教育というと、なにか知らないけれど反発する勢力がある。それを無視してやるか、言い方を変えるかです。とにかくこれは絶対必要なんです。と私は思っています。

土田　先生の学校で、例えば外国語教育のここがポイントではないかというお話はないでしょうか。

田村　大人の方が分かっていていただきたいのは、いまの子どもは英語とコンピューターは嫌がりません。絶対必要だと思っています。ですから、きちんとしたヒントなり手続きをやれば、引っかかってきます。英語とコンピューターはやっておかなければいけないのだというのは、はっきり理解しています。

すべての子といわれるとあれですが、あるレベルの子であれば、多少とも知的訓練、あるいはそのことに興味を持つ、関心を持っている子であれば、ものすごく持っています。あとはきちんとしたものを用意してあげるというだけではないでしょうか。

その点については、日本はまだ十分でないですね。まずコンピューター教育の施設は先進国では日本が一番貧困ですね。特に公の教育でですよ。私立は一応頑張ってやっていますが、公立は予算でやるものですから、本当に充実していないです。これはもう何年か先には必ずマイナスがきます。

私のところに、実はブリティッシュ・スクール・イン・東京という学校があるのですが、これはイギリスの政府と共同してつくった学校です。ここをご覧になるとびっくりします。小学校のときからのコンピューター教育の中味。こんなに違っているのかというくらい違いますね。長い間、日本は安上がりで教育してきたから、それでいいと思っているのではないかと思うぐらいです。

それから、英語教育も同じです。全然お金をかけようとしないです。いまいる人を使って教育しようという。いまいる人では教えられないんです。教えられているならとっくにやっています。教えられないんです。

だけど、必要だと子どもは思っているんです。そこをどうするかです。そのことに対してキャンペーンをしていくことがとても大事ではないかという気がします。

土田　では、髙坂先生、お願いします。

髙坂　道徳教育ですが、私もいま経済同友会で、もう十五年以上ですが、学校と企業の連携の会というのがあって、そこでボランティアで手を挙げて、学校から講演に来てくれというと、必ず行っています。

それはもともとなぜかというと、われわれの世代は、あまりにも家庭教育を無視してきている。もう働くことでいっぱいだったので、多少、贖罪意識がある人が手を挙げているわけです。

そういうところで話をするときに、まず大切なのは礼儀。横浜から少し西に行ったところに、湯山文右衛門という方が開いておられる寺子屋のようなものがあって、私はそこへも一回見に行きました。そこに書いてある一番の言葉は、「礼なき者は学ぶに及ばず」と書いてあるのです。それからあといろいろ書いてある。

つまり、もう江戸時代でも、日本がいろいろなことをしてきた。そのなかで、一番の中心は「礼なき者は学ぶに及ばず」だということだと申し上げています。

それから、宮沢賢治のお母さんだったと思いますが、あなたは人のために生きるために生まれてきたということを子どもに教えているんです。やはり母親の力は非常に大事ですから、そういうことをまず教える。ですから、私も学校へ行ったら、そんなことをいつも話をしています。

それから、先ほどの平川先生の話ですが、百人一首。これは非常にいいのだろうと思います。和歌も俳句もいいのですが、百人一首を学校で取り入れたらどうですかということは、どこへ行っても言っています。これは非常にいいことだなと。ＰＴＡの会にも来てくれというので行きますけれども、そういうことを親が薦めたらどうかなということを思っています。

英語教育は、やはり平川先生がおっしゃったように、もう特別な教育でやっていかないと、全員同じレベルで英語

を教えるのは、いまの日本では無理だろうと思っています。

それともう一つ。英語、英語といったときに、もう既に話も出ていますが、われわれが外国人と話をするときに、ネイティブの人は別ですが、まず日本語で考えているんですね。その日本語で考えているものを、英語なりスペイン語なりに直して話します。ということは、考えている日本語の中味がよくない限り、国際社会で相手にされない。一回は会ってくれても、二回目にアポイントを申し込んでも、アポイントは取れない。しかし、つたない英語であっても中味がしっかりしていれば、その人の話は聞きたいということで、アポイントを申し込めば受けてくれる。

ですから、もちろん英語というツールは大事ですが、その前に、日本語でものを考える、その中味が大事だということをいっています。そんなことです。

土田　どうもありがとうございます。英語教育の問題ですが、たとえば、国の指示で各機関が大学を点検評価する場合に、地方の小さい大学でも、どれくらい国際化をやったかを点検評価の項目にしています。そのような大学はむしろその地域との関係でやるところに持ち味があるのですが。一律に国際といっても、無理やりよその国と協定を結んでも、ほとんど空協定になるんですね。つき合う外国大学とのバランスがとれなかったり、費用もかかります。グローバルランキングも、日本はこのごろ急にどんどん下がっている。

渡辺先生は、学長をされ、その前にも筑波大学や東工大の教授もされていて、外国語教育、特に先生の場合はご専門上英語や中国語にご関係が深かったのではないかと拝察いたします。道徳的な問題も含め、もう時間があまりないのですが、ぜひご意見があれば。

渡辺　ご指名ありがとうございます。そんなたくさんのことは話せませんが、五〇年間、大学で教員をやって、自分でいうのはおかしいのですが、ボーン・ティーチャーだと思っております。

外国語教育、特に外国語教育ですが、諸先生がおっしゃっているように、全員の力を平均して伸ばそうなどというのは、無謀そのものだというふうに私も考えております。何パーセントか分かりませんけれども、あるパーセントの人間に半端ではない外国語教育を、徹底的にやる。あとの学生はもっと自由に勉強してもらうということです。

いま、皆さんは、大学は四年制だと思っていらっしゃる方がほとんどだと思いますが、どんなに長くとっても大学は三年です。少し前までは二年半でした。

そのなかに語学、英語は必修ですよね。私どもの大学ですと、第二語学が選択必修になっています。さらに教養教育がたくさん入っています。そうすると、結局のところ、専門教育はほとんどできないというのが現実なんです。私

はそれを実に残念なことだと思っておりましたが、なにもできずにリタイアしてしまった。

一つ提案があります。語学はマーケットに任せてくださいという提案です。マーケットでいい語学教育をやってくれているところはたくさんあります。そこである特定点を取ったものを大学が単位として認める。そうしてやれば、大学のカリキュラムの編成の自由度がぐんと上がるんです。日本の大学のランキングも結果として上がっていくことになると思います。

語学教育で学生をいじめ抜いているというのが現状です。田村先生の高校、中学は、非常にレベルの高い学生が集まっているからよろしいのですが、多くのの大学の語学教員の多くは、ほとんど贖罪意識に近いものを持っていますね。食いたくないものを食え、飲みたくない水をもっと飲めという、そういう感覚に耐えられないのです。もっと自由にさせてあげたいですね。

いずれにせよ言いたかったことは、大学のカリキュラム編成の自由度をもっと増すことによって、各大学の特色を出すことができる。それを妨げているのが語学教育だということを、学長を辞めたいまになってからでは遅いのですが、文科省もいまの私の提案を許してくれるかどうか分かりませんけれども、強い実感として私が持っているということを申し上げたかった次第です。

土田　どうもありがとうございました。

そろそろ時間もきてまいりました。本日は四先生から大変有益なお話を伺いました。現在は鎖国してすむわけでもありません。また、江戸時代に鎖国した時も、精神的には先ほどの平川先生のお話しのように、東アジアの普遍言語である漢文を学んだりというように、文化的には開国しているところがあって、地域と普遍がほどよくバランスがとれていたのではないか。それが日本文化をはぐくんでいた。むしろ今はそれが無いのかもしれません。

本日はまたそれぞれの先生方から、理念を具体的に授業にどう生かすかというお話まで聞けました。田村先生が指摘された宗教と道徳の問題に関しては、日本弘道会の会祖の西村茂樹が、明治時代に『日本道徳論』を書いた時に、宗教を世外教、道徳を世教としたうえで、宗教では同意がなかなか取れないので、日常の誰もが遵守できるような道徳を、上からでなくて、みんなで考えていくことが必要だと主張されたことを想起します。この弘道会はそのような思想から設立されたわけです。道徳的基礎がなければ、日本は列強に滅ぼされるという危機意識は当時大変深刻なものでした、日常レベルでの価値観の共有は、国の安定につながります。多民族国家であるシンガポールでもリー・クワンユーのときに似た試みをし、アメリカのハーバード大学の杜維明などがブレーンでやって、そこでは儒教を使お

うとしたのがうまくいかなかった。しかしだいたい儒教が広まったところは、案外ほかの宗教も共存できるのです。もっとも西村茂樹は、儒教だけですむとは決して言っていません。一つの思想に固執せず各思想のよいところを是々非々で取れと言っておられます。ともかく日常レベルでの価値観の共有がなされていれば、異なった宗教も同居ができるのではないでしょうか。

今回は新たな世界情勢の中で、観念的にではなく現実認識をもとにして、しかも理念を持ってどう進んでいくかということについて、かなり具体的なお話で示唆を得られたと思っております。

ちょうど時間がまいりましたので、実はフロアからもご質問があろうかと思うのですが、申し訳ございませんが、これでこのシンポジウムはお開きにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

司会　どうもありがとうございました。

これをもちまして、弘道シンポジウム二〇一六「グローバル化時代にどう向き合うか」を閉会させていただきます。本日のシンポジウム、基調講演をお聞きいただきまして、日本ないしは日本人が、今後グローバル化時代にどんなふうに考えていくかについてなにかの参考になればと思います。本当に今日はどうもありがとうございました。

講師等プロフィール

基調講演　講師

渡辺（わたなべ）　利夫（としお）　先生

拓殖大学学事顧問・前総長。昭和十四年六月山梨県生まれ。昭和三十八年慶應義塾大学経済学部卒業、昭和四十五年同大学大学院経済学研究科博士課程満期退学。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学教授・学長、同大学総長を歴任。

外務省国際協力有識者会議前議長、第十七期日本学術会議会員、アジア政経学会元理事長。外務大臣表彰。正論大賞。

シンポジウム　パネリスト

平川（ひらかわ）　祐弘（すけひろ）　先生

東京大学名誉教授。昭和六年東京都生まれ。昭和二十八年東京大学教養学部教養学科卒業。仏伊給費留学。昭和三十九年同大学大学院比較文学比較文化専攻博士課程満期退学。同年東京大学教養学部助手、昭和四十四年東京大学教養学部助教授、同五十三年同大学教授を経て現職。文学博士。

毎月第二・第四土曜日荻窪読売カルチャーで『源氏物語』を原文とウェイリー訳を対照して講義。

田村（たむら）　哲夫（てつお）　先生

学校法人渋谷教育学園理事長。昭和十一年東京生まれ。昭和三十三年東京大学法学部卒業。住友銀行を経て昭和四十五年学校法人渋谷教育学園理事長、平成十四年学校法人青葉学園東京医療保健大学・大学院理事長に就任。現在、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター理事長、政策研究大学院大学客員教授、教員養成評価機構理事長、国立大学法人東京学芸大学教育諮問会議委員、国立大学法人宮城教育大学経営協議会委員を務める。

この間、中央教育審議会副会長等各種審議会委員、日本私立中学校高等学校連合会会長、日本ユネスコ国内委員会会長を歴任。

高坂（こうさか）　節三（せつぞう）　先生

公益財団法人日本漢字能力検定協会代表理事会長。公益社団法人日本弘道会理事、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター理事。元東京都教育委員、元拓殖大学客員教授。

昭和十一年京都府生まれ。昭和三十四年京都大学経済学部卒業、伊藤忠商事㈱入社。平成元年同社取締役・アメリカ会社執行副社長、五年同社常務取締役・中南米総支配人、七年栗田工業㈱専務取締役、十一年同社取締役会長、日揮㈱社外取締役を歴任。

この間、経済同友会幹事、同会憲法問題調査会委員長等を務める。

コーディネーター　土田（つちだ）　健次郎（けんじろう）　先生

早稲田大学教授、大隈記念早稲田佐賀学園理事長、日本中国学会理事長、日本儒教学会会長。昭和二十四年東京都生まれ。昭和四十八年早稲田大学第一文学部卒業、昭和五十三年同大学大学院文学研究科博士課程満期退学（東洋哲学専攻）。早稲田大学文学部専任講師、同大学助教授を経て現職。博士（文学）。

この間、早稲田大学第二文学部長、同大学文学学術院長、同大学常任理事（副総長）を歴任。昭和五十四年に日本弘道会評議員、平成十二年同会理事、平成二十四年同会副会長。

弘道シンポジウム　二〇一六――実施概要

―グローバル化時代にどう向き合うか―

十月二十五日（火）神田学士会館にて

一、日時及び会場

・日　時　平成二十八年十月二十五日（火）
　十二時三十分～十六時三十分

・会　場　学士会館二階大講堂（二〇二号室）
　千代田区神田錦町三―二十八
　☎〇三―三二九二―五九三六

二、主催・後援団体

・主　催　公益社団法人　日本弘道会

・後　援　文部科学省・日本道徳教育学会

三、テーマ

・グローバル化時代にどう向き合うか

四、開催の趣旨

戦後七十年を経た今日、我が国を取り巻く環境は、ヒト・モノ・カネ・情報等が国境を越えて容易に行き交ういわゆるグローバル化の時代を迎えております。とりわけ数年後のオリンピックの開催を控えていることもあって、この潮流は益々加速するものと思われます。

一方、西欧における難民問題に象徴されるように、グローバル化時代における負の側面も顕在化してきております。

このような状況の中にあって、グローバル化時代に生きる日本人という視点から、グローバル化時代の到来が抱えている問題や、グローバル化時代の下における日本及び日本人の在り様等について、先生方からご提言を頂き、ご参会の皆様と共に考えたいと思います。

五、講師等

＊基調講演

・講　師　渡辺　利夫先生（拓殖大学前総長）

＊シンポジウム

・パネリスト

平川　祐弘先生（東京大学名誉教授）

田村　哲夫先生（学校法人渋谷教育学園理事長）

髙坂　節三先生（公財・漢字能力検定協会代表理事会長、本会理事）

・コーディネーター

土田　健次郎先生（早稲田大学教授、本会副会長）

六、当日のプログラム

一一：三〇～受付開始

一二：三〇～開会

※総合司会　山崎　隆司先生（元晴海コーポレーション顧問・本会参与）

・主催者代表挨拶（鈴木勲日本弘道会会長）

・来賓祝辞（文部科学大臣祝辞を有松育子生涯学習政策局長代読）

一二：五〇～基調講演

（休　憩）

一四：〇〇～シンポジウム

・提　言（各十五分）

・追加提言（各五分）

（休　憩）

・質疑応答・ディスカッション

・総括

一六：三〇～閉会

七、記録の公開

シンポジウムの記録を本会会誌「弘道第一一〇五号」に掲載する。

八、参加者

一一〇名

弘道シンポジウム二〇一六アンケートの概要

一　今回のシンポジウムについて

◉「テーマはいかがでしたか」への回答

- 時宜を得た適切なものでした。
- テーマとパネラーの組合せが良く多岐で面白かった。
- 最大の関心事でわかりやすく奥の深いテーマだった。
- 国際問題を解決する国際人材等の輩出が日本の教育に求められており、ジャストミートのテーマでした。

◉「時間配分はよろしいですか」への回答

- 適切でした。
- 各十五分の提言後の意見交換はわかりやすい組立てだ。
- コーディネーターがうまく配分していた。
- 少々長いと感じたが実のある講義のためには必要だ。
- 短く感じた。基調講演にもう少し時間が欲しかった。

◉「全体としての感想をご記入下さい」への回答

- 示唆に富んだ指摘、提言で考えさせられ勉強になった。
- パネラーの専門分野のバランスが良かった。
- 講師、パネラーの特長が良く出た話を聴け面白かった。
- 大変厚みある内容で遠方より来た甲斐があり又来たい。
- 日本人の魂ある人間として今後の人生に生かしたい。
- 日本及び世界の将来を考えるのに役立った。
- ナショナルであることがグローバル化に大切と感じた。異文化への関心をもつべきことも大事と思った。
- 道徳の根幹について宗教が論じられ良かった。
- 道徳教育は生命尊重などを中心にすべきだ。
- 人の才能を見ぬく人材をつくることも大切ではないか。
- 難民、移民についてもふれられ非常に勉強になった。
- 飛び級の提言は素晴らしい。
- 十六回連続参加し、長い歴史を感じます。

二　今後希望されるテーマについて

- 日本と東アジア（日中韓問題等）
- 日米関係の将来について
- 東洋哲学又は儒教について
- 宗教（特にイスラム等について国はどう対処するか）
- 教育勅語について
- モラロジーについて
- ＡＩと人間性について
- 道徳教育の教科化
- 学習指導要領について
- 日本経済の将来と日本人の生き方（貧富差と生活等）
- 少子化対策（外国人の受入れ方策等）
- 皇室のあり方と国民

【連載講座】

論語入門(五)

――孔子のただ一つの自慢――

土田健次郎

孔子は自慢をしない人でした。その孔子が唯一誇ったのが、自分ほど学問好きはいないということでした。

子曰く、十室の邑(ゆう)、必ず忠信丘(きゅう)の如き者有り。丘の学を好むに如(し)かざるなり。

［子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉、不如丘之好学也。］（公冶長篇）

現代語訳してみましょう。

先生が言われた。「十軒ほどしかない小さい村でも必ず私程度誠実な人間はいるものだ。ただ私の学問好きには及ばないがね。」

「十室」は、ここでは十軒。「邑」は村。つまり極めて小さな村のことです。「丘」は孔子の諱(いみな)（生まれた時に親がつけた名前）です。自分で自分のことを言う時には諱を使います。

ここに「忠信」とありますが、「忠」は自分の心が誠実であること、「信」は他者に対して誠実であること。つまり両方で、誠実であることです。孔子は「忠信」をかなり重んじていました。孔子は「子四を以て教ふ、文行忠信」[子以四教、文行忠信](述而篇)と言っています。孔子は「文(古典)」、「行(礼などの実践)」、「忠」、「信」の四項目を教えたということですね。また「忠信を主とす」という語もよく使います。孔子にとって「忠信」とは日常生活での道徳的心構えの代表のようなものだったのです。その重視していた道徳的姿勢について、孔子は私程度の人はいくらでもいると謙虚に述べているのです。そしてその上で、自分の好学を強調しているのです。

葉公孔子を子路に問ふ。子路対へず。子曰く、女奚ぞ曰はざる。其の人と為りや、発憤して食を忘れ、楽みて以て憂を忘れ、老の将に至らんとするを知らずと云ふのみ、と。
[葉公問孔子於子路、子路不対。子曰、女奚不曰。其為人也、発憤忘食、楽以忘憂、不知老之将至云爾。]
(述而篇)

現代語訳してみましょう。

葉公が孔子のことを子路にたずねた。子路はお答えしなかった。先生は言われた。「おまえはなぜこう言わなかったのかね。その人となりは、発憤すると食事を忘れ、楽しむと憂いを忘れ、老いが迫ってきているのにも気づかないとね。」

「葉公」は問題のある人物だったので、弟子の子路はその質問に答えなかったのですが、それはともかく、

孔子がここで「発憤」とか「楽しみ」と言っているのは、明らかに学問に燃え、楽しんでいることです。

孔子はまた次のようにも言います。

子曰く、之を知る者は、之を好む者に如かず、之を好む者は、之を楽しむ者に如かず、と。

［子曰、知之者不如好之者、好之者不如楽之者。］（雍也篇）

現代語訳してみましょう。

先生が言われた。「知る者は好む者には及ばず、好む者は楽しむ者には及ばない。」

これも学問についての言葉です。学問は知識を増やすよりも、学問を好むこと、更にそれよりも学問を楽しむことが大事なのです。本連載の第一回で、『論語』冒頭の「学びて時に之を習ふ。亦楽しからずや」という語をあげました。学問はとにかく楽しいはずなのです。学問を楽しむというのは、単なるお題目ではなく、孔子の実感だったのです。

ところで次の語は有名ですね。

子曰く、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり、と。

［子曰、朝聞道、夕死可矣。（里仁篇）］

現代語訳をしておきます。

先生が言われた。「朝、道を聞くことができれば、夕方に死んでもかまわない。」

先にあげた「老の将に至らんとするを知らず」という語は、学問に熱中するあまり老いることすら気づかなかったということでしたが、道を聞いたら死んでもかまわないというほどの情熱はおそらく死ぬまで続いたのでしょう。

晩年孔子が病み、見舞いに来た弟子の子貢に向かって「太山壊れんか。梁柱摧けんか。哲人萎れんか(泰山も崩れん、太い柱も折れん、哲人も萎えん。)」と詩を賦して落涙し、更に子貢に対して「天下には道が無くなって久しく、私の言うことを大事にしてくれる者もいない」と嘆いたということが前漢の司馬遷の『史記』孔子世家に出ています。この『史記』という有名な歴史書は、孔子よりも四百年も後の文献ですし、『論語』を見る限り、孔子は自分のことを大仰に語ることを好まない人なので、天下の霊峰の泰山(太山)に自らを比すような表現には多少違和感を覚えます。つまりこれが本当に孔子が賦した詩かどうか疑問も残るのです。もっとも孔子が学んでいた学問は、単なる知識欲ではなく、自己を高めるとともに世の中に道を実現させるためのものでしたから、その肝心の社会的貢献の方の使命を果たしきれずに死ぬことに対する焦燥の思いから、このような崩壊感覚に満ちた言葉が発せられたものかもしれません。

確かに孔子には自分の学んだ道を世に実現しきれなかったことへの悔いは残ったかもしれません。ただ孔子の好学は、それとは別に深い内的衝動のようなものであったように思います。それは命の灯火の消え

るまで続いたことでしょう。孔子はこのように言います。

子曰く、古(いにしえ)の学者は己の為(ため)にし、今の学者は人の為にす、と。

［子曰、古之学者為己、今之学者為人。］（憲問）

現代語訳します。

先生が言われた、「昔の学問をする者は自分の内的な欲求のためだったが、今の学問をする者は人の目を意識してのものだ。」

学問は、博識なのを他人からほめられたり、試験に合格して人の注目を集めるためにするものではなく、あくまでも自分の内面から湧き上がってくる自己向上の意欲をもとにするものなのだと言うのです。孔子は自分が偉大であるという自慢はしませんでした。ただ学問をすること自体の意義と喜びを誰よりも強く感じ、また実際に倦(う)むこと無く学問し続けた人でした。孔子は、悟りすました人間ではなく、真の意味での求道者だったのです。

（本会副会長・早稲田大学教授）

〔資　料〕

西村先生論語講義速記　第三回（その二）

明治三十四年七月七日

（為政篇続き）

子曰　君子周而不比　小人比而不周

君子小人は孔子は常に明白に分って置かれたが、実際世の中に昔ばかりでなく、今日でもあって、其のする事が丸で反対である、君子の方で参れば何処までも善い方であって君子を用ふれば国が治平安穏になり、小人を用ふれば国が危くなる、凡そ世の中の治まりが悪いは君子は用ひられぬで小人が用ひらるゝ、これは人間の弱点と見えて何時も何時も小人が用ひられます、此にも其差別を説て戒めてある、「君子周而不比」周はあまねく、比は偏党なりとあって今言ふ党派と云ふは是れに當ります、君子は人と交るに周して總体に普くして此人にも彼人にも同様に実意を以て交って一方に偏ってそれに党をせぬ、誰にも彼にも交るべき道を以て交る、彼人ばかり贔屓をするとか別段に親密にすると云ふことはせぬ、「小人比而不周」小人は偏って比することばかりする、党派とか党派に這入らぬでも自分の気に入った人とか、又は自分に前○に親切にする、人類一般に普くすることをせぬ、今言ふ公徳、小人は公徳をしらぬ、自分の党派の者には力を用ひ、党派以外の者になれば構はぬ、意見の異なりたるものは敵の様に見て害を施すことが甚だしい、これは不思議なもので二千年前に孔子が斯う言って置かれた、唐では何時も此の気味がある、君子は何時も此の通り、小人は何時も此の通り、漢の世の黨錮（トウコ）の争ひ、明の世の東林の徒といふはこれであって両国の亡びたるは此れが尤も害をしました、我国でも是は戒めねばならぬ、すべて一方に贔屓する人は小人であり、人間は同様に見て同じく信義を以て交るは勿論君子である、其本は心の公と私とより起るのであります。

子曰　学而不思則罔　思而不学則殆

これは名言でありまして今日に至るまで此通り相違ない事であります、学問成就すればそれで智慧が明かになった

と思ふ、学問成就してもそれでは足らぬ、自分に思ふことをせねばならぬ、今日何学士となっても学んだは学んだが思ふと云ふことが足りませぬ、東西国が違ふとか古今宜しきを異にすると云ふことは思はぬ、唯習ふただけで理非を極める、今日の学者には東洋西洋の国風の違って居るのをしらず西洋の事を其まゝ此国に用ひんとするものが多い、さういふのは罔い、即ち昏闇である、然らば思ふさへすれば宜いか「思而不学則殆」学ばずに自分の考へばかりで極めて斯うだと云って定めると其の了簡も誤まる、危険な事を引起す、上の句は今日の立派な学者にあり、下の句は田舎から出る議員などにある、此の前の章や此の章は二千年後の今日に居ても甚だ的切の教である、けれども聖人の語は極く汎く説きてある、汎き中に精密に考へれば眞理がある、御同然に学問をした者は切り込んで時勢に合せ自分の身に引合はさねば経書を読んだ詮がない、所謂体認をなさねばならぬことである、

子曰　攻乎異端斯害也巳

此の章は判りの悪い章でありまして註に拠れば異端は聖人の道にあらざる楊子墨子の類、根本の主義の異って前に一端を為したる教と云ふ義である、「攻」は専ら治むるといふ事なり聖人の大中至正の道に異にして前に一端を為せる道を治むるは害になりて善くないと言はれた事である、古註では楊子墨子と云ふことは言ってない、唯々異端は帰する所を同くせざるとばかり言ってあります、新註の方では圏外に佛氏の事まで言ってあります、後世の人は疑ひを起す、楊墨は孔子の時まで世にない、然らば孔子の時に異端と云って指すべきものが見えぬ、又攻と云ふ字を治むこともあれども此処等では少し無理である、「信乎異端斯害也巳」と云へば判る、但し本文にさうは書いてない、兎も角も先不判の章である、徂徠は異端を攻(せむ)ると云ひ、攻(おさ)むるは玉を攻むるに使ふが道を修むるに使ふたことはないと云って居る、楊子墨子は此時はない、主義の異った学問を攻(せ)めるのは是れ害のみと仰っしゃったのである、異端の学問は打ち切って置くが宜い、自然に消滅する、それを異端に向って攻撃すると激して害があると、徂徠は説きました、格別必要な章でもないからそれ位にして置きます、

子曰　由　誨女知之乎　知之為知之不知為不知是知也

これも此通りでよく分って居る、孔子の語る「由」、由は御門人の子路、其方に「知之」物事を知ると云ふことを教へて遺らうか、それは斯ういふことである、「知之為知

之」知って居ることは知って居るとするが宜い、「不知為不知」知らぬことは知らぬとするが宜い、然らば知らぬことを教へて呉れる人もあり、又質問することもある、然るを知らぬことを知りたる振りをするときは人も教へてくれず、自分も工夫をなさず生涯知らずに仕舞ふ、それでは学問の為でない、知りたることは知ると為し知らぬことは知らぬとする、これは平凡な事の様であるが実際あることで話の工合や何かの釣合で知らぬことも知りたる風を為したりする、それは知らぬどういふ事であると言って質問する機会を失ふことがある、子路と云ふ人は氣の勝った人で知らぬことも知りたる風を為したと見える、それで斯ういう戒めがあったものと見える、

子張学干禄子曰　多聞闕疑愼言其餘則寡尤　多見闕殆愼行其餘則寡悔　言寡尤行寡悔禄在其中矣

御門人の子張「学干禄」此の「学干禄」と云ふことは不判りのことで種々説があり、先づ禄を求むるを学ぶと読むが當り前である、官途に就て俸禄を求むる、それを学ぶといふは餘程可笑い、一齋焦には「子張学テ干レ禄」とある、それでも稽かでない、詩経に旱麓篇がありまして「愷弟君子、干レ禄不レ面」とある、其篇を学んだと云ふ註もある、それでも充分でない、此処ではさういふ事に関はらず子張が禄に有つくことを尋ねたものと解して置きます、其時の孔子の御答へに「多聞闕疑」多く書物を読むと多くの事が知れるが、昔は書物が少ないから聞く方が多くなれば知れぬ、多く種々なことを聞いて、多く物を知って「闕疑」疑はしいことは闕き取りて慎んで其の餘った確かな事ばかりそれを話したり書物に書く様にせねばならぬ、さうすれば人から尤めらることは少い、凡そ疑ひのある事を言ったり書物に著はすと後とで悔める事がある、人の嘘を聞いて本当かどうか見分けぬで又人に話す、旧とは自分が嘘を吐きたことでなけれども自分で言へば自分の嘘になる、それから「多見闕殆」昔は書物が少いから多く人の行ひを見て善悪邪正を知る、彼の人の仕事は危険であると云ふことは止めて是れならば大丈夫である道にも外れぬ確かと云ふ所を行ふ、例へば一六勝負をやるとか力に餘ることは皆な危きを行ふのである、それを闕いて仕舞ふて其の餘りの丈夫の事を行へば後悔する事が寡い、此の二語は誠に好き教訓であるが、愚老などは今に至って此の語に外れる事の多いのは恥入ることである、「言寡尤」言った言葉に尤め寡く行った事に悔の寡き時は「禄在其中」禄は自然と其中にあるといふ事である、人間は能く我身を修め立派な人になれば宜

い、聖人の道では祿を干むることは重しとはせぬ、

哀公問曰　何為則民服　孔子對曰　挙直錯諸枉則民服　挙枉錯諸直則民不服

哀公は魯の君である、魯の哀公が孔子に御尋ねになるにどういふ事をしたならば人民が此の方に心服するであらうと云ふ御問ひ、「孔子対曰」子曰といはず孔子曰くとあるは君に對しての御答故に丁寧に書いてある、それは「挙直錯諸枉」正直なる人を挙げ用ひ、枉った者を使はずに差置く、さうすれば民心は服する、其の反対に枉った者を引上げて眞直ぐな人を棄てゝ置き為さるれば民は服しませぬと、御答になった、「挙直錯諸枉」と云ふ語は古語か諺の語を引かれたものであらうと徂徠は言って居る、平生の語と使い方が異って居るからさうかも知れぬ、

これも雑作もないことの様であるが実際それに違いござらぬ、直き人のする事は道に違ったことをせぬ、枉った事をする人はどこまでも皆な枉ったことをする、今日もやはり同様である。

季康子問　使民敬忠以勸如之何　子曰　臨之以莊則敬孝慈則忠　挙善而教不能則勸

季康子は魯の三家の一人である、大層勢力のあった人、季康子は道に志の有った人と見えて季康子の問答が所々に見えて居る、季康子が問ひますのに、我人民をして「敬忠」敬と云ふのは上を敬し季康子自分を指して吾々の如き上に立つ者を敬ひさうして忠義を尽くさす、さうして「勸」勸は仕事を進んでする、即ち気分が進むので奮発と云ふ様な気味になる、君を敬ひ忠義を尽くし事をするに奮発してする様にするにはどうしたら出来やうかと云ふ問である、随分六ケしい問である、ところが其の御答に「臨之以莊」人民に対するに、上から下に対するを臨むと云ふ、莊は壮とは違ふ、壮はさかん莊と云ふ字は厳と云ふ字の代りに使ってある、人民は莊と云って厳にする、人民に臨むは厳にせねばならぬ、容貌端厳顔色挙動を正しくせねばならぬ、容貌端厳にして民に対すれば民は上を敬ひます、自堕落な姿(なり)をして見せれば敬ふ心が厚くない、「孝慈」なれば自分が親に孝を尽くし慈は慈愛、人民に慈愛を尽して取扱いをすれば人民は忠を尽くす、それから致して「挙善而教不能」善き人はズシズシ挙げ用ひ、不能者は教えてやる、さうすれば人民は気が引立って仕事に精を出してやるよふになるといふ御答である、これを行へない故に惰民が出来たり、上に叛く者が出来る、これも千古の金言でござります。

（寄　稿）

自然災害と人の心　空に飛ぶ気と心

（そして地球の病的発作と治癒力の考察）

瀬川爾朗

終戦を乗り越えた若者の気力

私はこれまで地上、海上、海中、そして空中における地球研究に従事してきました。それは仕事と言うよりも、自分にとっての憩いと言っても良いと思っています。今、これまでの地上、海上、海中、そして空中での多角的な研究を覆い包む一枚の大きいシーツは何だったのか、それを知るのが私の強い願望です。将に空を飛ぼうとする若者の広い心意気を見せたいのです。自分の生活で思い出すのは、第一に Low Teen の世代に無意識で行った、思いもよらない行動だったと思います。

真冬の二月、それは一〇歳ごろでしたが、岩手県の釜石で、水を気温で凍らせて、いかなる結晶ができるかの研究をやりました。その時の気温は零下五度でした。しかし、私は暖房もせず、特に厳しい防寒着も付けずに、朝から晩まで外で暮らしたのです。水が、気温と時間の変化によって、さまざまな結晶を作りながら凍っていく姿が、小学生にとっても大変に面白く、いろいろな形や透明度を変化させて凍る姿を楽しんだのです。そして、今度は、やがて春になり、楽しみが読書に広がりました。あの時代は大東亜戦争敗戦直後の時代（昭和二〇年…二三年？）でしたので、本屋さんも少なく、本もなかなか見つかりませんでした。しかし、親に小遣いをせびって、二冊の本を買いました。第一冊は、イギリスの本だと思いますが、「宝島」でした。そして二冊目はアメリカの「エジソン」の伝記でした。宝島はいわば絵本なのですが、あの単純で、しかも元気なストーリイが気に入り、繰り返し繰り返し読んだのです。エジソンの方では、新しいモノ作りにものすごく共鳴して、電球、電話、ラジオ、ニワトリの〝ひよ

こ〟の孵化、自動車まがいの機械についても、夢中で読み飛ばし、ニワトリの卵の孵化の実験を真似した時には、ヒーターの制御がうまく行かず、あやうく火事になるところでした。その後、中学生になると、農業、言い換えれば、庭弄りに興味を持ちました。以前にも話しましたように、私の生家はお寺でしたので、空いている土地はいくらでもありました。その一部を私が借りて、思いつくままに、作物を植え、片隅に囲いを作って、ニワトリと山羊を飼いました。このような新しい生き物を手にすると、その育て方を本などで勉強するのではなくて、お寺のお手伝いさんをちょっと捕まえて、いろいろ聞いて覚えたのです。ニワトリは全部で十羽ほど居り、その内、雄が三羽もいたものですから、しばしば喧嘩をし、挙句の果てに、私が後ろを向くと、おしりに噛みついて来たりして、なかなか性質の悪いものでした。

農業で今でも忘れられない事があります。現在と違って、当時の肥料はすべて「生ごみ」から作り上げたものでした。私の例では、トイレに貯まった大便、小便、捨てられた魚や肉と、その骨、皮などです。特にトイレの便、小便を畑に運ぶことは、それだけで特殊な技術を要します。木製や、金属製の、大変にお粗末な容器に、その肥料を入れ、一人で、手で持つ、あるいは棒を使って二人で担ぐ、などして、畑に運んで行き、畑の畝（うね）と畝との間の線に沿って、柄杓（ひしゃく）で均等に撒く、という〝難事業〟なのです。お百姓さん達は、この作業を実にスムーズにやっているのです。その時、私は一〇歳程度でしたが、年配の叔母さんと二人で、木製の容器に入った肥料を運んだのですが、この肥料は、結構、重たく、一度暴れだすとなかなか止まらず、桶から飛び散って、人の胸や顔に引っ付いてしまうという、性質の悪さなのです。私も最初は慌てたのですが、問題は私の相手になってくれた叔母さんとの、動きのリズムが合わないのだということが分かり、少しずつ、要領が良くなってきました。この時は私も、何としたものかと、一時呆然としたのです。こんなことで、私は小学生の頃は、学校の勉強よりも、自然現象の方にはるかに興味を持ち、毎日好きなことをして暮らしました。これについて、親は何も言わなかったのです。

空中での研究、それはどうすれば、また何のために

これまで、前回、前々回のご報告の中で、陸上における地震津波の脅威や、海中における超高圧海水系の脅威等について、思いつくままにご紹介いたしました。陸上や海中では、人が肌を接してお相手が出来るという意味では、親しみがある訳ですが、時に度が過ぎると、仕打ちを受けることがあります。一方、空中では、人間は、足が地に着いていないので、事故があると、時に命を失います。思うに、現代人は地上（時には地中）で、また海中で、そして、さらに空中で、思いがけない災害にでくわし、己や、仲間に苦悩をもたらし、一生に悔いを残すことがあります。

しかし、かかる状態で、私は、恐らく、私の最後のチャレンジだと思われる空中への挑戦を、人生の最後かも知れないと思いつつヘリコプターで行ったのです。固定翼の航空機の欠点は、スピードが出過ぎる、言い換えれば、低速飛行が出来ない事なのです。我々が好んでヘリコプターを選ぶ時には、空中でゆっくり動きたいとき、あるいは空中で停止して、そこで仕事をしたい時などです。登山家が山で遭難し、それを救助する時には、これほど便利な飛行体はありません。また、一方で、ヘリコプターの低速性能が特に必要なものが、空中からの重力測定なのです。今お話ししようとしている空中重力測定は、地球深部の構造研究の最先端の一つとして普及しつつあるもので、坪井忠二先生の偉大なる御指導を得つつ、空中における研究の一つとして、お話ししようと思います。

坪井忠二先生

東京大学での私の指導教官は、かつて寺田寅彦の弟子であった坪井忠二教授でした。坪井先生は、当時、日本における地球重力場の研究の第一人者で、その研究で日本学士院賞を受賞しています。また、文部省の測地学審議会の会長を長くお勤めでした。ご存知のように、地球の重力場は凡そ九八〇 gal (cm/sec.sec) という単位で表されますが、これは簡単に言えば、一Gと言われる加速

度なのです。運送屋さんが荷物の重さを判断する時に、一Gという加速度を基本にして、物の重さを測定します。ところが、厳密に言いますと、一Gと言う値は〇・三％ほど、地球上では場所により異なるので、精密な測定の場合には、重力一Gと言ういい方は当てはまらないのです。地球上の重力の研究は十七世紀のIsaak Newtonによって画期的な成果が得られ、特に万有引力の法則の発見が有名ですが、しかし、精密な調査、研究のためにはそれでは足りないのです。現在は、地球上の重力値は、一〇のマイナス一二乗galのローカルな違いまで検出しています。重力の単位はgalなのですが、この下の単位は、mgal（ミリガル）、μgal（マイクロガル）、ngal（ナノガル）、pgal（ピコガル）です。mgal＝一〇のマイナス三乗gal、μgal＝一〇のマイナス六乗gal、ngal＝一〇のマイナス九乗gal、pgal＝一〇のマイナス一二乗galとなります。地球上の重力値は、時代とともに測定精度が上がり、それとともに、重力の時間変化をも測定出来るようになりました。重力の時間変化で最も顕著なものは、いわゆる潮汐変化というもので、地球と月との位置関係によって、毎日、一〇〇μgal程度の時間変化をしているのです。重力の変化は、海面の上下（海洋潮汐）に対応する重力時間変化ですので、目で見ることも出来ます。

さて、地球上の重力変化では、「場所、高さによる変化」が重要です。地球の表面に分布する地殻やマントルは、その形や密度が場所によって大きく変化しています。この変化は重力に顕著に表れます。また、この変化を知ることによって、地殻やマントルの細かな形の変化や、密度の変化が分かるのです。例えば、これらの変化を辿ることにより、地下の活断層の分布なども分かります。実は、私が行った空中重力測定は、原子力発電所周辺の活断層を調べるのが第一の目的でした。現在かなり多くのデータが集まっています。活断層の測定にはmgal、つまり一〇のマイナス六乗G（ここでG＝九八〇galとして）の精度が少なくとも必要となります。ヘリコプター専用重力計は、私が開発したもので、特許も採っていました。私は大学の研究室にいた時代から

今日まで、精密重力測定を専攻していましたが、特に測定環境が極めて悪い状態、つまり、船、航空機、ヘリコプター等、重力計を搭載したときに、滅茶苦茶の擾乱加速度がかかってくるという状態でも、ちゃんと測定ができるという装置の開発を目指していました。それにしても、これらの装置が使用可能になったのは、何といっても、米国が開発したＧＰＳ測位装置がキイポイントを握っています。ＧＰＳ(Global Positioning System) は米国が四〇年ほど前に開発したもので、その当時はそれほど評価していませんでした。日本でも、あれは軍事目的なのだ、といって、位置をそんなに細かく決めても何の価値があるのだろうか、というのが、政府のお役人を含めて、日本側の評価でした。しかし、その後、ＧＰＳが使用料を無料とし、世界中の人に使わせるようになり、精度がcmまで上がるとともに、実に様々な利用法が摘要され、今や無くてはならないシステムになっております。現在私は、ＧＰＳと精密ジャイロを使うことにより、ヘリコプターを飛ばしながら、地球上の重力変化を一mgalの精度で測っているのです。しかし、正直に言いますと、ヘリコプターがあの騒音の中で飛び続けている姿を見ると、とても、その内部で相対精度一〇のマイナス六乗でもって重力を測っているとは思えないのです。

　実は、これで精密重力測定がなされたのかと言うと、そうはいかないのです。ヘリコプターは、見れば見るほど奇怪な装置です。何よりも不思議なのは、飛行原動力である水平プロペラ（水平回転体）と人が乗る機体とを繋いでいるものが、わずか直径10～20㎝の垂直の回転軸で、それが、恐るべき速さで回転しているのです。見ていると、この回転軸は何時ちぎれても不思議ではないという恐ろしさです。この怖さは、私等よりも、毎回操縦しているヘリコプター・パイロット達も良く知っているのです。私達は、ヘリコプターが飛び立つ前には、重力計のチェックと同時に、機体の状態、気象状態等を慎重にチェックしますが、ヘリコプターの機長、副長は、周辺の状況に納得するまでは、なかなか搭乗しません。この慎重さは機長によっても異なりますが、ある機長などは、これから飛ぶ数十km先の雲をじっと観測し、

その雲が、自分らにいかなる影響を与えるかを十分理解してから、やっとヘリコプターに乗り込むのです。

原子力発電所の候補地

これまでに私共が測量した地域は、電力会社では九社あったと思います。その中の何社かは原子力発電所を造る計画で、その予定地の事前調査の場合もありました。ヘリコプターの飛行高度は、殆どが一五〇〇m、二〇〇〇m程度の場合が多く、飛行速度は六十ノット、あるいは九十ノットの場合が多かったのです。自動車などと違って、航空機はある程度の速度がないと不安定になりますので、運転する側は、六十ノット以下にはしない、と言っているのです。六十ノットと言うと、一分で一海里、つまり約一八〇〇mですので、一秒で約三十m飛ぶので、重力測定を一秒ごとに行うとすれば、測定の分解能は三十mということになります。これは通常の地殻構造調査のための測定としては十分と考えられます。

ヘリコプターの位置を毎秒メートル単位で決めるということは、一〇年前には夢のようなことでした。最初にヘリコプターで重力測定を始めたころには、地上の要所々々に測位用の電波基準点があり、ヘリコプターはそれを基準にして、自分の位置を決めるようになっていました。このシステムでは、測位誤差や電波障害などがあって、航空機の測位精度はかなり落ちることがあるのです。この点、GPS空中測位は、航空機の内部と、地上に、何点かのGPS基準点を置くので、航空機のcm測位が可能になります。このようにして、重力測定の機体位置変動から来る誤差、機体運動によるダイナミック誤差、気温、気圧変動による誤差が、適格に補正され、地上における測定に劣らない空中重力測定が可能になったのです。これまでに空中重力測定を行った地域は、関東平野、鹿島灘、相模湾、駿河湾、遠州灘、淡路島、瀬戸内海、佐田岬、豊後水道、国東半島、陸奥湾、下北半島、恐山、などでした。これらのデータは、速度六十ノットで、一秒間隔のデータですので、一点／三十mの重力データ密度で測定されることになります。

省庁が違うと測定値が異なる

ヘリコプターによる空中重力測定で、初めの頃に得られたデータから画期的な事実が見つかりました。それは茨城県のつくば市から、東へ飛び、霞ケ浦を出て鹿島灘に入るコースを飛んだ時でした。コースは陸海を跨って往復約200㎞、往復共に同じコースを飛んで、データを比較し、再現性を見たのです。行きと帰りの重力異常を比較すると、つくば市側の陸上データに合わせた時に、鹿島灘側の海上データがそろって十五mgal大きくなる、という結果が得られたのです。重力値は鹿島浦を通過するときに、行き帰り共に、等しく急変したのです。これは大変に重要な発見でした。

実は、以前から、重力測定値は陸からと海からでは大きく違うのではないかと言う疑いがありました。しかもそれは、科学的な不一致ではなくて、測定者による違いではないかと疑われていたのです。ここで発見された値の違いは、陸上データは建設省の測定、海上データは運輸省の測定が基となって見いだされたのです。これまで、たとえ科学的な測定であっても、違う省庁の測定は、省庁の権限によって、決して互いに比較検討はされない、それを比較することは、省の自尊に関わることだった訳です。文部省関連の研究所とは違い、他省庁間の仕事の比較検討は今後、欠かすことは出来ないと痛感いたしました。この問題に関する私の論文は二〇〇五年に地球物理関連誌Earth Planets Space誌に発表されています。

おわりに……陸、海、空での病的発作か

これまで、陸海空での測定の意味と各々の差異についてレビューしてまいりました。その結果は、それぞれに大変にユニークな特徴があり、いずれも大事件であることが分かったのです。陸、海、空のいずれの世界でも、この地球が決してやめない自己破壊の結果として、時に地球上のすべての生き物に激しくぶつかり、大きな影響を及ぼすことになるのです。この大災害は、地球自身の病的発作なのであり、その発作を自ら治療している過程の一つの顕れと理解すべきでしょう。

（東京都会員・東京大学名誉教授）

〈弘道余話〉⑳

有田支会

鈴木　勲

今年の「弘道フォーラム」は、有田支会が引き受けて下さり、町会議員十名を含め参加者一九二名で盛会であった。私は遠路のため土田副会長に行って頂いたが、支会の役員の熱心な運営に感銘を受けたという。

このフォーラムで配られた「社団法人日本弘道会有田支会の歩み」は、小冊子ながら、会誌「弘道」の記事を丹念に集めて見事にまとめられており、有田支会を紹介するに好適な資料と考え、ここに紹介することとした。

有田支会の創設は、昭和三十九年十一月一日で、「弘道」七六六号（昭和四〇年一・二月号）に、支会結成の記事が載せてある。

本会から当時の主事の渡辺正勇さんが出かけて講演をしている。当時の会員は二七名であった。

西山清治支会長のあいさつによれば、有田の儒学者正司碩渓翁の流れをくむ方々が数名日本弘道会に入会されていて、それらの方々が発起して創設されたものである、という。

結成時の支会長は深川明氏、副支会長は金ケ江三郎雅綱氏、幹事（事務局長）は古田実氏であった。深川さんは深川製磁株式会社社長、金ケ江さんは同社常務取締役、古田さんは有田町助役であった。

その後、昭和五十年四月十九日に、野口先生が長崎地方旅行の途次、支会を訪れて講演しておられる。

私も、平成十四年十二月に家内と共に招かれて、支会総会に出席し、町立有田中学校の立志式にも招かれて、「読書と青春」と題して講演をした。

三日間滞在して支会の方々との懇談会も心温まるものであった。帰京の際は古田さんが車で福岡空港まで送って下さった。途中、背振山を越えて、天然記念物の楠を案内して頂いたり、吉野ケ里遺跡を外から眺め、昼食に鰻を御馳走になった。

「有田支会の歩み」には、「古田実さんを悼む」と題する記事が副支会長の出雲悠司さんの筆で載っている。

古田さんは乞われて有田町収入役から助役に就任し、五期二十年間助役をつとめられた。

有田支会が昭和三十九年に創立されるや、支会幹事（事務局長）に就任、以来平成十九年三月まで四十二年五ヶ月の長い間支会の運営に当られた。日本弘道会の総会には、深川支会長と同道で出席され、他の支会の人々との交流を深められた。

奥様を亡くされてからは、体調を崩され寝こむことが多かったと聞いた。

学識豊かで、人格円満、高潔な人柄、家族を大切に思い、こよなく地域を愛した古田さんは九十五歳で逝去された。心から哀悼の意を表する。

安倍首相は十一月十七日、ニューヨークで米国のトランプ次期大統領と会談を行った。南米ペルーで開かれるＡＰＥＣ（アジア太平洋経済協力会議）首脳会議の途次立ち寄ったもので、八日の大統領選挙で当選したばかりのトランプ氏が会う初めての外国首脳だけに、世界の注目を浴びた。

政治素人のトランプ氏は大統領選挙期間中、メキシコからの密入国を止めるために、国境に壁を作れ、イスラム教徒の大量移民は拒否、派遣米軍の駐留国は経費負担を増やせ、さもなくば撤兵、国内産業の空洞化阻止―これまで、世界の平和維持に貢献してきたアメリカ外交を見直し、内向きのアメリカ第一主義に戻る、とのメッセージを鮮明にしていた。これは八年間のオバマ大統領のきれいごと消極外交に対する本音での挑戦だった。

北斗星

トランプ新大統領と安倍外交

澤　英武

トランプ氏は安倍首相との会談で、大統領選挙期間中の言動とは別な指導者の側面をのぞかせた。会談後、安倍首相は同行記者団に、「新指導部人事などで多忙な時に、時間を割いてもらい、感謝している。温かい雰囲気の中で、私から、日米の信頼関係をより確かなものにしたい、との思いを率直に述べた。そして、改めて、より広く、深く話し合おう、との考えで一致した」と、トランプ氏への好印象を語った。

安倍首相は、四年前の政権スタート以来、地球儀を俯瞰する積極的平和外交を展開、春の伊勢志摩サミットでのリーダーシップなど、国際社会での存在感を高めてきた。

トランプ政権は来年二月の発足後、半年ほどはその外交姿勢が定まらないだろう。安倍首相にはその間、アジア太平洋での外交イニシアチブをとるチャンスと責任が巡ってきた。

まず、ＴＰＰ（環太平洋戦略的経済連携協定）を率先して批准、他の参加十カ国に安心を与える。そして、ＴＰＰ脱退を表明しているトランプ政権に対し、ＴＰＰがアメリカにとっても経済利益だけでなく、自由社会のルールが不法社会に対する強力な武器となることを悟らせる。

インド、東南アジア諸国、そして、オーストラリアは中国の露骨な覇権行動に正面から対峙する安倍首相の強い姿勢を望んでいる。米国新政権の姿勢が定まらない今こそ、安倍首相の出番、正念場である。

熟年からの健康

(54)

肺炎球菌ワクチン

松本　慶蔵

現在、六十五歳以上の死亡原因の第三位を肺炎が占めていますが、その中の原因細菌は圧倒的に肺炎球菌なのです。従って高齢者の肺炎予防に有効なワクチンを接種することには大きな意味があります。

前回私は孫から感染をうけ、マイコプラズマ感染症になったことを書きました。これと同じような事が、肺炎球菌感染症でも生ずるのです。

それ故、小児の咽頭にある肺炎球菌の主要なものを排除するために小児に肺炎球菌ワクチン接種が役立つと想定されます。

実際に日本では既に13価肺炎球菌ワクチンを生後二ケ月から一歳迄に三回接種して、四回目を生後一年以降二ケ月あけて接種して終了することが厚労省の方針になっています。これは国の定期接種となっていますので、これ迄の費用よりもぐんと安価になっています。

扨てその効果について述べますと、前記13価と云ったのは主要な肺炎球菌の十三種の異なる肺炎球菌型が含まれており、接種後口腔内からこれらの重要な菌種が消失したことが、欧米、日本の研究で確認されています。それによりこの十三種の肺炎球菌による肺炎や髄膜炎が消滅ないし激減したのです。この報告を見た時、私はその効果に本当にびっくりしました。現在この小児用ワクチンは特にワクチンとしても進歩しており、従来のワクチンに特別な安心出来る蛋白をつけていますので、つよい抗体が多量に産生されるようになっています。この13価の前、一時7価の小児用ワクチンが用いられた時代が短期間ありましたが、該当しない菌型が口腔内に増加し、一時医学上問題になりました。それを反省し、13価に増やして成功したのです。今日肺炎球菌の菌型は九三種知られていますが、すべてヒトに感染し病原化する訳ではなく、三分の一がそのヒト感染能を保有していると考えられています。13価蛋白結合型（小児用）ワクチン使用後やはり該当しない菌型の一部が変っていますが、それ程心配した事ではありません。

ワクチンは元来有効で、低価格で安全である事の三条件が必要である事は私の持論です。その中、高齢者肺炎球菌ワクチンにも変化が生ずるかも知れません。勿論以上の三条件をみたすものです。

（長崎大学名誉教授、結核予防会学術相談役）

読書案内

『自由と規律』
池田潔　岩波新書
1993 年改版 720 円＋税

多田建次

英国保守党のキャメロンとジョンソンは、イートン・オクスフォードの同窓だそうです。

最近イートン以下パブリックスクール（全寮制私立中高等学校）の教育をテーマとした名著『自由と規律』が再び改版され、読みやすくなりました。初版は昭和二十四年、すでに一〇〇刷をこえ、多くの読者に感動を与えました。

かつて『信濃毎日新聞』のコラムに、伊那の高校長が書いていました。自分は学生時代貧しさに耐えかねて、しばしば自殺の誘惑に駆られた、たまたま手にした本書に励まされ、その危機を切り抜けることができた、爾来人生の折目節目にひもといては、自分を叱咤激励して今日にいたっている、と。本書はこの種のエピソードに事欠きません。

もちろん本書に描かれた英国人なり英国社会が、ほんの一面にすぎないことは承知しています。世界各地の植民地支配はもとより、パレスチナやイラク問題の淵源をさぐれば、英国の対外政策にたどりつく。一人のハリファクスやグレーの善意が、免罪符になるものでもなく、アラビアのロレンス自身政府に利用されたと後悔していました。また当の英国人社会学者や教育学者から、パブリックスクールへの激しい批判を直接聞いてもいます。

とはいえ、したり顔で本書を時代錯誤と片づける立場に、私は与しません。少なからぬ読者が若き日における本書との出会いを、意義深い経験としているからです。

大学入学後日吉の丘で教えを受けたのが、池田先生でした。白髪、童顔やや赤ら顔、夏でもスーツにネクタイ、謹厳な英国紳士そのものでした。英書講読の時間は緊張に満ちていました。下調べを怠るなどは論外、学生は型通りに英文を読み解釈をする、その間鋭い質問が矢のように浴びせられる。学問に王道などあろうはずもなく、先生はごくあたりまえに指導をされたにすぎないが、受験のくびきをとかれ開放感にひたっていた我々に、襟を正させるには十分の迫力でした。

先生は退職後国家公安委員に就任されました。社会党の推薦の由、先生の人格・識見の前には、社会主義イデオロギーも無力でした。

ちなみに本書の影響で、パブリックスクールをモデルとする海陽中等教育学校以下いくつかの学校が開設されています。

モニター便り

「特集　緑陰随想ー心に残る旅」
（平成二十八年 七～八月号）

『古寺巡礼』とともに

吉丸　蓉子

和辻哲郎の『古寺巡礼』が奈良への旅の契機だった。出会ったのは四十五才ころ、岩波文庫である。和辻が大正七年に初版を出版してから二十八年目の改訂版である。頁を繰りながらわずか三十才の和辻の美的感性と該博な知識について行くことができずため息ばかり漏らしていた。それでも奈良周辺の古寺古仏への憧憬はかき立てられいつの日か必ず訪れると心に決めたのだった。

最初に訪れることができたのは五十代も半ばになってからである。大津への出張時なんとか半日を割き浄瑠璃寺を詣でたのだった。京都山城へ奈良駅からバスに揺られた。和辻らが人力車と徒歩で奈良坂を越えて行ったという街道をたどってみたかったのである。とはいえすでに七十年も経ている。舗装された国道筋は当時の面影をどれだけとどめていたのだろう。が、いくつかの丘を越えいくつかの村を過ぎたさきに浄瑠璃寺は往時もかくあったであろうと思わせるように静かな山里に抱かれていた。荒びた感じの池を隔てて簡素なお堂がやさしげに建っている。庭の隅の三重の塔も愛らしく温和しい。懐かしい佇まいだった。穏やかで安らかな時が流れていた。和辻はこの光景を「古人の抱いた桃源の夢想」と言った。そして近代人もその夢想に共鳴するものを心の底に持っていることに気づき驚くのである。古人は浄土の幻想を山深い山村であるこの地に表した。浄土庭園と阿弥陀堂。簡素な外観からは想像もできないような堂々たる阿弥陀如来を九体、横一列に安置した。浄土教『観無量寿経』の九品往生思想

に基づいて、上品上生、上品中生から下品下生まで九種の往生人に応じた九種の浄土へ導く九体の阿弥陀様がそれぞれの印相をむすんで在すのである。和辻の想像力はきらびやかな堂塔と美しい浄土庭園、黄金に輝く九体の阿弥陀如来を創建当時に翻ってイメージし、さらにそこに寄せた古人の極楽浄土への切ない希求も実感したのだろうか。そこに近代人の一人として共鳴するものを感じ取ったのだろうか。

今、創建から千年の年月に洗われて、阿弥陀堂も三重の塔もあらゆる装飾を剥ぎ落とし浄土庭園も周囲の自然に溶け込んでしまっている。九体仏の輝きも失せてしまっている。浄土を渇望する人もいまはなく阿弥陀仏はただ慈悲だけを体現している。ここに遺されたのはやさしい山城の自然と渾然一体となった本質ばかりと思われた。懐かしさと安らぎにみたされて、しばらくの間葦が生える浄土池の濁った水面に揺らぐお堂の影を見つめていた。この今、ここが桃源だと思わずにはいられなかった。

このときから十年ほどたってから夫と一週間奈良を巡る旅に恵まれた。夫に見せなければならないものがあった。東大寺三月堂の不空羂索観音である。『古寺巡礼』の中で和辻は友人のZ君との会話を記している。Z君は不空羂索観音を天平随一の名作だと主張し、和辻は天平随一の名作を選ぶということであれば聖林寺の十一面観音を取ると言うのである。奈良滞在の五日目、この二体の観音菩薩像を同日のうちに比べ見たいと企んだ。

朝早くホテルを出、桜井線で桜井まで行き安倍文殊院で文殊菩薩を拝観してから聖林寺へは徒歩で向かった。桜井の里はのどかでなだらかな山の間に田んぼや畑がつながっている。静かな山里には農作業の影もない。多武峯（とうのみね）に連なる山裾に聖林寺はあった。国宝を蔵しているとは思えないような小さなお寺である。拝観者は私たちのほか誰もいない。奈良市の賑わいとは別世界である。十一面観音は渡り廊下を上り鉄筋コンクリートづくりの収蔵庫のような観音堂のガラスケースの中に在した。この十一面観音は廃仏毀釈の嵐の中で路傍にうち捨

てられてあったのをここのご住職だった方がもったいないとかついで来たのだそうだ。幸いであったが元々どのようなお堂にどのように安置されていたのかと偲ばれてならなかった。お姿の美しさ、気高さ、力強さは比類なく、前から横から斜めからと拝しながら見飽きることがなかった。和辻はこの観音と博物館でまみえている。若い和辻の美の感受力はみずみずしく彼はそれを世界的、歴史的視野から分析・洞察する。その上で「人の心を奥底から掘り返し、人の体を中核にまで突き入り、そこにつかまれた人間の存在の神秘を、一挙にして一つの形像に結晶せしめようとした」その所産であると記す。

聖林寺から三輪山をご神体とする大神（おおみわ）神社に詣で、そこから「山辺（やまのべ）の道」に入った。古代の幹線道路であり万葉の道である。いつかは歩いてみたいと念願していたのだ。三時間ほど歩いて途中から桜井線に飛び乗り奈良市にもどった。今日中に三月堂に行かなくてはならない。

タクシーを三月堂前までつけてもらった時には陽は大分傾いていた。それでも三月堂の中はまだ拝観者でごった返していた。いくつものツアーが入っているのだろう説明の声が交錯する。これより何年か前やはり出張の合間に、切望していた三月堂に立ち寄ることができたのは極寒の二月だった。東大寺境内にも三月堂にも人っ子一人おらず、たった一人おそるおそる薄暗い三月堂に入ったのだった。それは圧倒的な経験だった。不空羂索観音の、第一手の両の手をきっかりと合わせて祈る姿、その神々しい威厳がすべてだった。困難な仕事を抱えていたのだったかもしれない。ただ涙が流れて仕方がなかった。その時とはまるで違った拝観だった。だが、脇侍の日光、月光菩薩や四天王など十四を数える仏たちが安置された須弥壇の中央で一心に合掌する不空羂索観音の堂々たるお姿は変わらない。三目八臂の異形でありながら人間そのものである。同時に決して人間ではない。深く底知れないようなもの、厳として揺るがぬもの、満々と豊かなるもの、そしてあくまでも気高く清浄なるもの、これらの人体への具現で

あった。智慧というものなのだろうか、それとも大慈大悲と名付けるものなのだろうか。お堂を圧する不空羂索観音の祈りは荘厳そのものだった。喧噪の中で夫は観音の正面に座り込みいつまでも動かなかった。

（岩手支会　読者モニター）

――・――・――

日本弘道会綱領甲号（個人道徳）第六項「財物を貪らないこと、金銭に清廉なること」を目指して

正直に生きる

小倉　正敬

最近、不祥事・不正事件がやたら多い。政界の不祥事、経済界の隠蔽・不正、スポーツ界の薬物使用・賭博等々枚挙にいとまなし。がっかりするし、情けないし、腹が立つ。何とかしたい。特に人の上に立つ人、人々の憧れになる人には充分注意してもらいたい。不正は仕組みの根幹にある信頼を揺るがす重大な事件である。そこで、私達には今、何が出来るか。未来を見据えての教育、又、今しかるべき立場にある人に対する啓蒙、それらを、教育界は期待されている。対症療法的に、発生した事案に対策を取り続けるよりも、人間の基本をしっかりと抑える事が肝要である。とは言っても、この問題は学校・家庭・地域がそれぞれの得意分野を活かして分担して担うべきものである。

一　正しい生き方を教える

小学校学習指導要領道徳編では、「主として自分自身に関すること」の一・二学年の中に「嘘を付いたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。」という項目がある。

その解説によると、

「正直で誠実に、明るい心で楽しく生活する児童を育てよう。

児童が積極的で健康的な自己像を描くには、自己の誤ちを認め、改めていく素直さを持つとともに、誠実さを持ち、明るく楽しい生活を心掛けようとする姿勢を持つことが大切である。過ちや失敗は誰にも起こり得る事である。その時の自己保身的なごま

かしは、飽くまでも一時しのぎ的なものであり、真の解決には至らず、他者の信頼を失うどころか、自分自身の中に後悔や自責の念、強い良心の呵責などが生じる。それを乗り超えるのが正直な心であり、自分自身に対する真面目さであり、伸び伸びと過ごそうとする心の明るさである。そのような誠実な生き方を大切にする心を育てていくことが重要である。」と述べられている。正に、今の世相の歪を正す妙薬と言える。これらの文言をそっくりそのまま、不正をした人々に伝えたい。

学校は、これらをきっちりと指導すれば、教育は完結されたと言っても過言ではない。

二　事後処理は潔く

一生懸命やっても失敗する事はある。どんな人でも多かれ少なかれ失敗や間違いはある。隠して仕舞いたくなる事もある。しかし、その事実をごまかしてはいけない。メッキは直ぐに剥がれるし、長期にわたっては隠し切れない。失敗はごまかさずに、ちょっとの勇気を発揮して、直視すべきである。目前のリスクを避けるために、将来のリスクを大きくしてはいけない。そこが、隠蔽・改竄と正義との分かれ道となる。天網恢恢疎にして漏らさず。間違いを起こしたら、出来るだけ早くそれを認めた方が、再出発の早道である。

不祥事・不正事件は発覚した後の事後処理を見ていると、概して潔くない。未練がましい姿勢が目立つ。事情はどうあれ、発覚したなら潔く説明責任を果たして、出処進退を決めた方が良い。しがみつきは見苦しい。

二五〇〇年前の論語　学而第一によれば、「過てば則ち改むるに憚ること勿かれ。」

又、論語　衛靈公第十五によれば、「過ちて改めざる、是れを過ちと謂う。」

更に、論語　子張第十九によれば、「小人の過つや、必ず文る。」（小人が過ちをすると、きっと造り飾ってごまそうとする。）

今、正に、二五〇〇年前の先人に学ばなければならない。二五〇〇年も前に孔子さまは良くも言って

くれたものである。その後の人間の歩みには進歩が無かったのであろうか。

不正が発覚すると、言い訳、弁明、釈明、申し開き、言い開きを、くどくど言う。概して彼らは、往生際が悪く、潔くない。そして、往々にして、他人には厳しく自分には甘い。

三　庶民の願い

昔から「損して得取れ。」という言葉がある。即ち、大きい利益を得ようとすれば、小さい損をして下地を作る事が大切である。小損を厭えば結局大利を逃がすことになる。昨今、不正を働く者は、「当面、得取って、挙句の果てに大損する。」のである。つまり、自分のやっていることが、長期的に見て、間尺に合わない事だと認識すべきである。

しかし、「水清ければ魚住まず。」とも言う。でもそれは一時的なことで、長期的には耐えられない。歌の文句にもあるように、「嘘も真実の一里塚」なのであって、嘘は一時しのぎに過ぎないのである。

今の日本の国民、又、未来の国民にはこうであって欲しいという庶民のささやかな願いを叶えてもらいたい。特に、財物を貪らないこと、金銭に清廉なることを切に願う。

宝塚歌劇団のモットーに、清く、正しく、美しくという言葉があるが、これは、心を清く、行いを正しく、外見・所作を美しく、という意味であるが、このモットーに従うと、清くなければ、人を引き付けられない。正しくなければ、長く持たない。美しくなければ、本質に迫れない。

本稿では、青臭い書生論の謗りを受けても、昨今の世相に鑑みて、聖人君子を目指す訳ではないが、あえて清廉潔白なることを主張したい。

四　まとめ

世の中は、正直の底力の下に謀略がうごめき悪が栄える。しかも悪は善をあざ笑っている。だが、いかにあざ笑おうとも、善なくして悪は成り立たない。このことは古今を通じて変わることなし。悪は善に食べさせてもらっているのだ。

（平川支会読者モニター）

平成二十八年 秋の叙勲受章者

会員の方で秋の叙勲受章者は、次の方です。謹んでお慶び申し上げます。

瑞宝双光章（教育功労）

馬場 英彦 殿

七十七歳　岩手県

元　公立小学校長

瑞宝双光章（教育功労）

安西 迪彦 殿

七十二歳　千葉県

元　公立小学校長

会告

◎御寄付者芳名（平成28年10月）

金、一万円也　松本慶蔵殿（東京都）

金、二万円也　鈴木ふじ子殿（東京都）

◎会費領収報告（自 平成28年10月3日 至 平成28年12月1日）

1　この報告をもって領収書に代えさせていただきます。

2　お名前の上の○印は新入会員の方です。

3　お名前の下の括弧内の数字は会費納入最終年度です。

4　ご不明の点は本部事務局会員会費の係までご連絡下さい。

◎新入会員芳名（敬称略）（平成28年10月～11月）

（府県名）	（入会者）	（紹介者）
宮城県	淺見　紀夫	村上　良信
東京都	山本　昌子	山本　毅
東京都	斎藤　智潮	近藤　昌彦
秋田県	三澤　真人	ホームページ

◎新入会員芳名（敬称略）（平成28年10月～11月）

（支会名）	（入会者）	（紹介者）
佐倉	熊谷日出子	綿貫登美子
岩手	田代　航	八巻　恒雄
島根	吉田　雅紀	荒木　光哉

（宮城県）

○淺見　紀夫　(28)

（秋田県）

○三澤　真人　(28)

（千葉県）

平川支会45名分(28)　佐倉支会41名分(28)

八千代支会5名分(28)

（東京都）

○山本　昌子　(28)　真辺　将之　(28)

○斎藤　智潮　(28)　近藤　浩幸　(28)

（静岡県）

松下　魏三　(28)

（島根県）

島根支会180名分(28)

公益社団法人

日本弘道会会員名簿

平成28年12月1日現在

会長 鈴木　勲

副会長 土田健次郎

顧問 西澤潤一　安嶋　彌

理事 秋山富一　生平幸立　大澤幸夫　押谷由夫
木村治美　髙坂節三　澤　英武　多田建次
菱村幸彦　古川　清　松平直壽　茂木友三郎
渡貫博孝

監事 伊藤克巳　伊戸川敬三

参与 荒木光哉　飯塚一雄　小川義男　小野健知
貝塚茂樹　杉原誠四郎　辻　幸蔵　西村幸雄
藤原正彦　古垣光一　宮崎哲夫　山崎隆司

特別会員

石川忠久　石澤芳次郎　市川昭午　市村真一
大内一幸　小田村四郎　甲斐睦朗　加地伸行
梶田叡一　加藤尚武　金杉光二　狩野冨吉
川本裕子　菅野覚明　クライン孝子　河内朝夫
小堀桂一郎　佐藤禎一　白鳥　正　高橋史朗
高橋文博　橘木俊詔　田中英道　所　功
戸辺好郎　林　道義　春山宇平　馬場萬夫
福原　修　松本慶蔵　宗政秀治　八木秀次
矢口　孝　安田豊作　山折哲雄　山本哲生
横山利弘　横山安宏　若鍋尚志　渡部昇一

終身会員

今井千代田郎　榎本匡吉　大兼利之　片野嘉雄
亀山基恵生　京野正樹　笹森時雄　篠田惣治
清水常一　高石景一　積田義男　鶴岡寛三郎
常泉健一　仲村正和　西村喜久郎　繁田良一
古滝達男　山口武夫

海外会員

Mrs.Takako Klein　Mrs. Teruko SAIGU
Mr.&Mrs. Mikio&Kyoko CHIBA

一般会員

北海道
大月武志　斎藤友子　田村武男　富田迪夫
中村浩一

岩手県
大鹿糠倉松

宮城県
淺見紀夫　小林伸一　齋藤正美　西澤啓文
村上良信　渡邉　拓

秋田県
三澤真人

福島県
柴田司郎　畑　敬之助

茨城県
関　五郎　関口英夫　手塚裕康　永塚弘行
原田征夫　半田啓二　村山元理

栃木県
須賀　淳　塚田保美　若松静夫

群馬県
井上真由美　氏家　実　前田　勇　森下　功

埼玉県
青柳邦忠　天田耕一　新井慎一　安藤駿英
出　和夫　大倉健資　大髙住夫　小川輝之
河野幸枝　木村良平　草場宗春　熊谷富雄
小柳光春　須田　勉　高橋哲夫　高橋　勝
谷本良平　田村和凡　鶴田　登　渡嘉敷茂夫
友清哲治　豊田三郎　平井一夫　発智金一郎
三浦信子　水谷　至　矢吹　中　吉住龍雄

千葉県
東　清　安藤隆弘　飯塚　弘　鵜之澤康雄
大島和俊　大島民義　大城嘉規　太田和良幸
岡本親宣　小澤　皎　小澤　深　小田金　清
落合高省　加瀬正裕　河野覚兵衛　北尾美成

東京都
小島一郎　五代吉彦　小藤　計　今田　年
斉藤　守　佐伯清毅　重永泰彦　菅谷誠一
菅谷昌徳　鈴木仲秋　砂見茂博　祖父江昭一
髙木伸夫　立﨑　仁　塚本　隆　永井　輝
中川弘喜　中村二郎　長谷川國雄　日髙靖輝
古橋謙寿　前田昭一　松浦成子　宮下　修
山崎　侃　鑓水　浩　湯浅康右　米田耕司
和田昭通
会田正江　赤松　豪　浅井経子　渥美和也
阿部光夫　飯島　清　池野和己　砂金俊夫
石井俊一　石井隆治　石川正郎　出井朗夫
五十棲吉巳　今尾知義　岩渕信夫　大家重夫
大内保治　大門　隆　大賀佐怡子　大久保建紀
大野隆司　大平恵理　大矢根てる　織方郁映
沖　健嘉　長村幸雄　小野すみ子　葛山為久子
加藤勝博　鏑木義之　鎌田邦彦　神守隆一
亀谷一郎　苅田吉夫　川崎　修　菅野　啓
鬼澤佳弘　岸田輝夫　喜田安信　教職員連福祉財理事長
楠　元尾　畔柳正義　鯉川英一　香田裕子
古賀喜博　小谷田敏子　近藤浩幸　斎藤智潮
佐久間聖名子　左近司美代子　佐藤　孝　柴田　武
庄司昊明　庄山悦彦　新里昭子　鈴木重雄
鈴木　進　鈴木治子　砂賀　功　瀬川爾朗

	關　貴仁	園田秀一	高岡浩二	高田　賢
	髙間　勇	谷口泰三	田内龍治	堂　信一
	常田　寛	中田貴志男	奈良　威	西田富士雄
	野原数生	橋本美克	馬場しづ子	疋田卓三
	久田龍二	久恒仰平	吹浦忠正	福田峰夫
	松坂　弘	松本淳一郎	松山茂雄	真辺将之
	三浦良雄	水田　武	宮村貞一	村井昭三
	村越正則	森田昌之	師　俊紀	山口圭介
	山名和雄	山本隆雄	山本昌子	山本　毅
	渡部　武	渡辺　勉	渡貫竜也	
神奈川県	生山智己	石沢彰文	内海静雄	浦田　徹
	緒賀正浩	尾俣セツ子	金田正男	木下勝実
	小林三郎	駒井隆治	斎藤徹郎	佐々木晶子
	貞廣長昭	篠崎昭彦	武田伸昭	多田悦男
	龍口健一	立石健三	谷合　明	田沼茂紀
	土屋　嵩	西原孝夫	服部秀夫	半田栄一
	播戸正臣	福岡純一郎	藤田芙美	藤村和男
	牧　光徳	三隅田良吉	宮下弘充	山口圭介
	山口眞弘			
新潟県	板倉栄一郎	今成卓而	近藤滋子	櫻井　守
	菅原康夫	廣川正昭		
石川県	濱田　繁			
福井県	中谷実伸			

山梨県	淡路実春	梅澤重雄	生平齊月	山田　喬
	文珠川雅士			
長野県	大久保　保			
岐阜県	伊藤　壽	今井春昭	岩手達夫	岡﨑　久
静岡県	松下魏三	森下義明		
愛知県	大河原晧視	木村　寿	鈴木保實	高田敬子
三重県	山本とし子			
滋賀県	牛尾郁夫			
京都府	植田清宏			
大阪府	下野厚子			
兵庫県	北村俊夫	下田　陽	峯　美穂	森　一郎
奈良県	森岡正宏	山岡成光		
鳥取県	國岡靖夫	竹内善一	土井康稔	永井伸和
	長石　肇	濱口豊明		
岡山県	鳴海　榮			
広島県	坂本孝徳	廣渡博行		
山口県	伊賀訓之	長崎哲男	三浦晴彦	水野大直
愛媛県	正木啓介			
高知県	植村利夫	山﨑善正		
福岡県	大庭茂美			
佐賀県	小柳治道			
熊本県	本田一記			
宮崎県	後藤俊彦			

鹿児島県

池田哲之　山口昌司　吉冨政夫

支　会

島根支会

顧　問　浅野俊雄　飯塚一雄　狩野冨吉　松本幹彦

支会長　荒木光哉

副支会長　島﨑美徳　西　智文

監　事　大石武博　福島律子

幹　事　蘆田道昭　伊藤由紀夫　糸原次之　河原一朗
白石隆子　友森　勉　藤原　弘　山田忠男

事務局長　蘆田道昭

事務局次長　糸原次之　藤原　弘

会　員　青戸宏明　青戸良臣　赤江美穂　安達伸次
安部純生　安部　隆　安部　登　天津邦之
有馬毅一郎　飯國徹夫　飯塚　勝　飯塚裕司
飯塚隆一　石倉國男　石田和也　石原　肇
石原道夫　井上和朋　今井　靖　今岡　実
入江勝仁　岩浅宏志　岩井元康　岩田　進
岩成秀彦　上田業就　江口博晴　遠藤知己
大﨑能國　大西七恵　大森広子　岡﨑豊年
岡本修治　岡本昭二　小川正道　小倉雅介
尾崎安男　小澤秀多　小村孝志　恩田佳雄
景山高行　楫野妃都水　片寄　進　荊尾　俊
勝部和承　加藤純夫　兼折右慈　金築　聡
上谷慎二　嘉本輝雄　河角　静　川津愛子
川原良一　河村政經　木佐剛典　木佐由延
木次井悠介　北野静男　吉城聖顕　木村寧伸
久保田康毅　倉井正喜　倉本一三　黒田章義
桑原　弘　玄田初榮　河野義男　高野良彦
古浦義己　古賀隆昭　小島博野　小谷繁正
木次三八郎　河原史佳　後藤美利　小林修平
児山治正　小山峰明　近藤宏樹　作野廣秋
佐々木　茂　佐々木孝賢　佐藤　誠　佐堂　博
佐貫泰則　佐原　亘　山藤哲夫　塩川　寛
柴田　博　島田雅治　清水　寛　清水谷　圭
下岡博司　庄司　肇　須田絹代　須藤昌幸
須山泰則　曽田和彦　高尾　彬　高橋英二
髙橋成知　高見武男　多久和忠雄　竹﨑康次
竹谷　強　多々納鉄雄　田壷　勉　立脇通也
田中信道　田中久隆　田中瑞夫　千原一弘
津田美代子　鍔木　篤　坪内浩一　寺本夏雄
藤間元康　栂瀬久男　内藤章一　中奥雅士
中筋弘充　中野吟子　長崎義明　永岡達朗
長島　聡　永島典男　永野信吾　奈良井　滉
成相有一　錦織孝枝　西島正敏　新田康二
仁田　準　野津和夫　野津　満　秦　潔

早川　求　林　充也　原　周弘　原　敏
原　洋二　平木　榮　広江朝夫　廣江千年
広澤卓嗣　廣澤將城　福田和夫　福田浩三
福田正明　福田政隆　福賴敬二　藤井康夫
藤原弘道　藤原幹夫　藤原三葉　藤原泰樹
舟木征一　古瀬　誠　細木保興　松浦修六
松浦正敬　松嶋　博　松田武彦　松田美保子
松本正治　松本東一郎　三浦尚二　三浦稔子
三上昭憲　三島修治　水谷信明　三原治夫
武藤立樹　目次健司　森山祐次　安江英彦
安田達司　山川修司　山崎悠雄　山崎裕二
山下嘉三　山根憲昭　山本康治　山本弘正
横路仁朗　横山統晨　吉岡　登　吉田　修
吉田雅紀　吉長義親　米倉得雄　米山克正
若槻　徹　渡部昭久　渡部俊行　渡邊晴夫
和田秀夫　和田秀穂　和田弥生

野田支会

支会長　茂木友三郎
副支会長　東條三枝子
理　事　染谷　篤　藤井　浩　坂倉鋭一
会　計　戸辺勝恵
監　事　日下部寛太郎　前園君子

事務局長　戸辺好郎
事務局次長　仁木達哉
会　員　秋田　茂　阿部雅彦　飯田芳彦　飯森　淳
石井徳子　石垣紀雄　石山由美子　井田　裕
市原　智　伊藤　稔　稲橋光男　梅　建
遠藤由美子　遠藤房子　岡田宏之　小川恵美
加藤宏明　川井清明　川崎和夫　川崎裕幸
北川義行　北野浩之　清次一平　草刈俊晴
黒川　浩　桑原辰夫　桑原伸幸　小島宏之
小曽根正典　小林健二郎　小松崎　明　小山隆央
齊藤元宏　佐藤裕一　塩入千裕　芝崎好伸
島津孝行　下川泰弘　城川早苗　鈴木信人
関　志乃武　関根邦子　瀬戸芳男　高橋　保
高橋浩一郎　竹澤豊則　武田光弘　千葉均一
土屋孝之　戸辺光政　冨田　広　中居　章
中澤清人　永瀬　大　長妻美孝　中村　功
中村　司　中山武志　野崎弘之　長谷川昌男
畑谷武史　初見美保子　初見良昭　濱崎廣宣
早川　博　張替猛夫　張替智子　廣瀬純也
深野富紀生　船橋高志　古矢浩祥　細谷弘美
増田正実　松浦正典　松田　武　間中恵美
間々田英示　眉山俊敬　水沢栄光　宮内好雄
宮嶋理恵　村田　歩　村田弘信　茂木佐登子

森　功　森山典子　八代美穂　安田いく代
矢部雅彦　山口仁美　山崎和枝　山崎　保
山田桂一　山中武彦　渡辺清計

佐倉支会

顧　問　渡貫博孝　堀田正典　粟生喜三男
名誉会長　蕨　和雄
支会長　齋藤惠蔵
副支会長　石橋　実
監　事　秋葉二郎
理　事　綿貫登美子　小川弘子　清澤瞳子　松戸正利
岡本美典
事務局長・庶務　松戸正利
会　計　岡本美典
会　員　井坂幸彦　石渡輝男　井原重之　大川徹夫
大川靖男　小川勝寛　押尾豊幸　川名部　実
葛原千真　葛原利生　国友重弘　熊谷日出子
倉次和也　黒岡美江子　小出行雄　坂井昌司
佐久間　昭　佐藤金作　田中茂子　寺田辰夫
中村睦美　行方正夫　桧貝信一郎　藤江徳也
古嶋美文　松戸光男　真野好則　路野照雄
目等静子　森　栄一　森田敬介

安房支会

顧　問　安田豊作　福原　修　金丸謙一　長谷川孝夫
支会長　高橋博夫
副支会長　吉田幸昌　畑　俊一
監　査　永井幸彦　武田金市郎
幹　事　今宮靖雅　青木嘉男　安西信雄　髙梨哲朗
鈴木　亭　兵藤恵美子　坂口まさ子　小林　進
佐久間秀子　中村　謙　石井忠雄　安西迪彦
岩嵜美沙子　三平　勉　鈴木　敦　浅野孝一
溝江　晃　田村賢一　八巻一哉
地区委員　小藤俊夫　山本泰久　小松雄光　渡邉重雄
磯部和子　佐野義男　髙梨哲朗　本橋　仁
武田金市郎　永井幸彦　大溝好子
専門部
研修視察　畑　俊一　磯部和子　岩嵜美沙子
新春交流　坂口まさ子　兵藤恵美子　中村　謙
講演会　吉田幸昌　髙梨哲朗　武田金市郎
読書会　今宮靖雅　伊澤きよ子　山本泰久　鈴木　亭
庶務・会計　髙梨哲朗　安西迪彦　兵藤恵美子　磯部和子
（重複者有）
会　員　中村　謙　石井　秀
秋山里和　飯塚　浩　生貫敬子
石川基博　岩波正夫　大田文枝　小田喜明子

加藤　操　金木賢三　金房　保　鎌田久子
川上賢爾　幸田浩文　小林安生　高梨晃一
角田陽子　出山裕之　本間誠章　真木　泉
宮沢治海　望月　眞　本橋亮一　安田　茂
吉田久雄　渡邊嘉助　渡邊祐典

有田支会

支会長　西山清治
副支会長　出雲悠司
事務局長　金ケ江重綱
会　員　犬塚光夫　池田憲正　岩崎賢助　岩永正太
浦川友喜　大串忠弘　梶原貞則　金ケ江迪子
空閑尊一　空閑秀則　栗山　昇　小池雅文
副島利孝　田代正昭　田中瑛人　田中直良
辻　武史　手塚英樹　照井一玄　中島　尚
中村巌夫　西山　徳　西山智子　西山典秀
西山晴男　西山峰次　花田利男　馬場九洲夫
馬場久美子　林　札男　原田寿雄　廣尾千恵子
深川　巌　深川祐次　藤本安廣　古田　茂
古田　昇　松尾利興　松尾英明　松尾　齊
松尾文則　松尾雅晴　松永　将　松永俊和
水邊紘治　百田修二　森山隆子　行武　登

平川支会

顧　問　宗政秀治　東平喜久雄
支会長　関　政彦
副支会長　小倉正敬　伊藤鉄夫
理　事　伊藤典夫　根本鎮夫　長島靖祠　小倉　健
千葉武久
監　事　安藤好夫　近藤繁雄
事務局　切替良寛　川島一昭
会　員　池田広朗　池田和陽　伊藤義彦　井上正夫
太田茂雄　笠原幹夫　金子昭次　川島　悟
川名和夫　切替正房　葛田昌也　柴崎　稔
杉山　晃　鈴木六郎　高橋信夫　高山栄作
高山精司　筑紫静男　鶴岡　満　鶴岡芳男
出口　清　福原孝彦　藤江千秋　山口輝昭
山口幹雄　柳井　洋　山崎克巳　山田惠春
山中　晃　吉田安次　若林道郎

八千代支会

会　員　伊東稔雄　加賀谷　孝　小泉晴美　添田秀和
渡邊綱義

茨城支会

支会長　矢口　豪

副支会長　郡司勝美　大熊定男

幹事長　大内一幸　船橋　卓

幹事　平戸敬一　金井　正　白田　肇　秦　雅博
加瀬征雄　冨田正一　鯉渕逸夫　堂　英夫
鈴木康之　川又英宏
監査　村上貞夫　市毛宏知

会員　青木伸次　青野吉雄　秋田順一　荒井智則
井坂　孝　磯畑宗之　猪股亮一　伊藤哲雄
井上　昭　岩上　堯　海野吉輝　大久保紀夫
小野久幸　加瀬孝雄　兼川　哲　金子敏久
川上正裕　川崎正之　菊池正章　黒澤敬二
小林幸夫　小林大次郎　後藤善一　笹川正興
佐藤　進　篠原　光　島田俊男　下山田芳子
白井克昌　杉本泰士　鈴木一好　鈴木秀満
染谷　寛　髙野武夫　田寺洋二　竹村広治
鐵　正治　百目鬼博行　中田裕一　長島利行
永田信次　生井澤精二　西谷隆義　額賀修一
廣瀬文男　藤田隆之　益子勝己　丸山　孝
緑川　裕　柳生　修　矢口武和　山野隆夫
吉田栄吉　吉田　穣　米永勇人　渡邉英一
渡邉高志　渡邉哲郎　綿引道典　和田俊次

銚子支会

顧問　金杉光二　白土四郎　大木　衛　宮内隆夫

支会長　來栖亮吉

副支会長　酢谷伊知郎　石毛弘二

幹事長　石毛俊三

幹事　忍田善雄　鏑木　正　押田和彦　栗林武則

庶務・会計　越部　卓　宮本慎吾

監事　西谷倫子　堀井咲子

会員　明石登喜雄　安藤博正　飯田　誠　五十嵐俊雄
石川善昭　石神義藏　石毛　理　石見和男
岡野俊昭　小池　孝　越川文晴　小嶋昭三
佐久間啓子　佐藤米吉　猿田正城　椎名泰孝
椎名秀夫　高野朝一　田中啓康　中西　廣
房州洋一　松浦光善　宮内謙一　宮内　隆
宮内正一　百川東一

岩手支会

顧問　安藤　厚

支会長　八巻恒雄

副支会長　馬場英彦　櫻糀　毅

監事　向田實雄　矢羽々昭夫　藤澤信悦

幹　事

稲垣キツ子　大澤弘毅　小岩和彦　佐瀬壽朗
平　政光　多田英史　千葉史夫　中村雅英
西村倬郎　吉丸蓉子

事務局

事務局長　伊藤典夫
局員　岡田安生　小野寺くに　畠山文雄
総務部長　畠山文雄
副部長　千葉　亨
部員　安保位子　吉田耕也　川村晃博
研修部長　岡田安生
副部長　斎藤ヨシヱ
部員　藤川ひとみ　横沢幹雄　佐藤　卓
広報部長　小野寺くに
副部長　小森資司
部員　坂本行雄　佐々木善成　戸羽正和
阿部修志　荒川亨司　伊藤和史　伊藤一彦
伊藤正幸　岩船敏行　岩渕眞知子　江六前安巳
及川公子　太田厚子　太田原　弘　小沢一昭
小嶋久人　小野寺教子　小野寺正彦　小山田秀次
葛西茂人　加藤孔子　加美山悦子　川村　登
川村　浩　木内隆友　菊池　宏　工藤隆之
熊谷雅英　黒瀬　敬　桑原良幸　小苅米淳一
小林　満　近藤澄江　金野　治　紺野好弘
斎藤俊治　作山雅宏　佐々木壽洋　佐藤あい子
佐藤　功　佐藤金市　佐藤淳子　佐藤　進
猿川清吉　澤村憲照　菅原修一　鈴木千恵子
鈴木直子　外山　敏　髙橋克壽　高橋　繁
高橋眞司　高橋　司　高橋　司　田代　航
千田久邇治　千葉　茂　津川哲二　照井俊男
飛澤克昭　中軽米央子　中村雅彦　中屋　豊
新沼敏哉　仁昌寺真一　沼田英雄　橋本昌好
畠山　圭　畠山博明　藤島昭治郎　古川守人
堀切茂行　真壁信義　三浦　晃　三浦壮六
南　岩雄　武藤美由紀　村井研一郎　茂庭フヨ
森田誠喜　八重樫　勝　八木橋哲男　山口道明
山下秋雄　山田預喜　四井謙吉　和田　英
渡邉康二

事務局

事務局長　大澤幸夫
職　員　小島俊夫　白川耕市　秦　きぬ代　井原幸子
嘱　託　近藤昌彦　田村　誠

敬弔

高橋　昌郎　殿

平成二十八年十一月四日　逝去
享年九十五歳

本会参与
西村茂樹研究論文審査委員会委員
元「増補改訂西村茂樹全集」編集委員
元　清泉女子大学教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

事務局往来

12月8日（木）　12：00～14：00
＊理事会（於　学士会館301号室）
出席者　理事：鈴木勲会長、土田健次郎副会長、秋山富一、生平幸立、大澤幸夫、木村治美、高坂節三、澤英武、多田建次、菱村幸彦、古川清、茂木友三郎、渡貫博孝
監事：伊藤克巳、伊戸川啓三
顧問：安嶋彌
事務局：白川耕市
平成28年主要事業の総括等

支会だより

《安房支会》
《安房支会講演会》

期日　平成二十八年十月一日（土）
場所　館山市　コミュニティーセンター
講師　元館山市教育委員会教育長　安田豊作先生
演題　「我が人生　一〇四歳の生きざま」
来場者数　約二百人

恒例の安房支会主催の講演会、今年は安房支会初代会長で現在顧問の安田豊作先生を講師にお願いして開催した。

安田先生は大正元年生まれの一〇四歳。館山市立北条小学校に戦前・戦中・戦後、通算二十六年余勤務され、終戦直後の教育の混乱期に「コアカリキュラムの構成と展開」をテーマに全国公開研究会を開催、「北条プラン」で全国的にその名が知られるようになった。

北条小学校在勤中の昭和十九年四月より終戦まで兵役に就き、戦艦長門に乗艦、フィリピンのレイテ沖開戦で編隊を組む旗艦愛宕や戦艦武蔵が魚雷をうけて沈没する様を目の当たりにする中、辛くも横須賀に帰港、そこで終戦を迎える。

北条小後半の十二年間は校長職として在勤。「放送教育」や「学習の個別化と集団化」「教育のシステム化」等で度々全国公開研究会を開催し教育界に大きな足跡を残している。

館山市の教育長を十二年間努めたあと、七十二歳から趣味の世界に没頭、沈金・拓本・表装・篆刻・小仏彫刻・盆栽と多彩。表装・篆刻・盆栽は現在も継続中。一〇〇歳の年から新たに「漢詩」の勉強を始め、仕上げは色紙に墨書。

（安房支会事務局長　安西廸彦）

言葉のひろば

―――・―――

拝啓　この度は、ハガキ並びにたくさんの資料を送っていただき本当に有難うございました。仕事がらＰＴＡとのつながりが強く、地域の熱心な協力をいただいて勤めさせていただいています。特に大股地区は、大変好意的で役員にもなっていただいていますし、鈴木先生のご出身ということで益々親近感を覚えました。西村茂樹会祖については初めてその名を知りました。また資料からは、永い歴史があることも分かりました。近くにおいでの際は、是非お会いしたく存じます。ありがとうございました。

世田米小学校副校長　**平藤　幸男**

鈴木　勲様

―――・―――

拝復　時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、先般の「弘道シンポジウム二〇一六」では、こちらこそ大変お世話になり、ありがとうございました。非常に充実した素晴らしい催しだったと存じます。

また、当日の写真をお送りいただきましたこと、ご配慮に恐縮いたしております。

末筆ながら貴会の今後ますますのご発展を祈念いたしますとともに、略儀ながら御礼申し上げます。　敬具

平成二十八年十一月一日

田村　哲夫

日本弘道会会長　鈴木　勲様

―――・―――

謹啓　恒例のシンポジウムは、今年も盛会の中に終わりました。

基調講演は、渡辺利夫先生。人・物・技術・情報等国境なき時代で、今やグローバル化は避けられない。明治期の先輩達の努力の如く、文化の伝統を継承しつつ、異文化への理解と国際友好の精神を体験的に学ぶ大切さを温く説かれました。

パネラーの平川祐弘先生。本物の外国語教育と世界に通用する日本人の育成が急務と強調されました。次の田村哲夫先生。江戸時代の寺子屋、武士の儒教教育は、日本人の心の核と、強調。

高坂節三先生。グローバル時代はマゼランの大航海時代が始まり。英国王朝、独立戦争後の米国、米ソの冷戦を経て中国が台頭。少子化時代と共に訪日外国人が多くなり、労働力確保だけでなく、文化の理解が大切であると強調。

進行は、常連の土田健次郎先生。多岐に亙る内容や質疑にも適切に対応され、熱気と緊張に包まれた充実した会となりました。　敬具

平成二十八年十月三十日

島根支会長　**荒木光哉**

公益社団法人　日本弘道会

会長　鈴木　勲　先生

編集後記

⊙三笠宮殿下には十月二十八日に薨去され、十一月四日に斂葬の儀が行われました。長く天皇陛下のご活動を支えられ、学問を愛され、文化、スポーツに親しまれた殿下を、国民は深い敬愛の念を持ってお見送り申し上げました。

⊙アメリカ大統領選は、イギリスのEU離脱に次ぐ英語圏での大逆転劇でした。保護主義への逆行が危惧される結果になりましたが、グローバル化への公正、着実な進展を図る日本の役割はさらに大きくなると思われます。

⊙本号では十月二十五日、学士会館で開催された弘道シンポジウムの記録をお届けします。「グローバル化時代にどう向き合うか」を標題に行われたこの会は本年一・二月号の本誌特集テーマ「グローバル化と日本人」を深めるもので、基調講演は同号に論説を執筆いただいた渡辺利夫先生、パネリストには同じく同号に論説を執筆いただいた高坂節三先生と、昨年五・六月号に論説「日本人であり世界人であるためには何を学ぶべきか」を執筆いただいた平川祐弘先生、二十五年一・二月号に論説「グローバル人材『二十一世紀を生きる』について」を執筆いただいた田村哲夫先生にご登壇いただき、コーディネーター土田健次郎本会副会長の下に進行しました。

⊙渡辺先生は基調講演で、日本文明の歴史を振り返り、我が国の道義的、人道的な価値観を確認しつつ、今後どのようにグローバル化に向き合うべきかを論じられました。引き続いて、パネリストの諸先生からは豊かなご見識とご経験とに基づく示唆に富む提言・補足発言をいただき、質問に対する回答では渡辺先生も参加し、日本経済の動向、日本における難民の受け入れ、英語教育の在り方等について踏み込んだ議論が交わされました。参会の皆様には得るところ大きく、お忙しい中をご協力いただいた諸先生に心から感謝申し上げます。

⊙今年のノーベル賞は医学・生理学賞に大隅良典東京工業大学栄誉教授が輝き、日本人の受賞は三年連続となり、喜ばしい限りです。その大隅先生は実用的成果を求める近年の傾向に関連し「科学研究は役に立つべきだという捉え方をされると、基礎的なサイエンスは死んでしまう」と述べ、大学における基礎研究の充実の必要性を訴えておられますが、もっともなことだと思われます。

⊙国内各地の地震は止まず、大きな被災地の困難が続く中で、いつ来るか予測ができない災害への備えは、何ものにもかえられぬ第一の課題です。新たな年、災害からの復興を祈るとともに、モラルの見える社会を作りたいものです。

皆様には佳き新年をお迎えください。

⊙次号は、「企業経営と倫理」を特集します。ご期待ください。（昌）

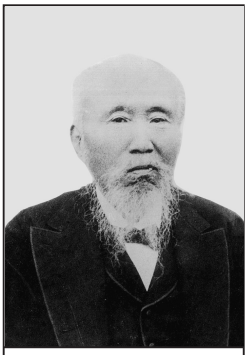
平成二十八年十二月三十一日印刷
平成二十八年十二月三十一日発行（定価五〇〇円）
編集人　鈴木　勲
発行人
郵便番号101-0064
東京都千代田区西神田三―一―六
発行所　公益社団法人　日本弘道会
TEL　〇三（三二六一）〇〇〇九
FAX　〇三（三二八八）〇九五六
振替口座〇〇一四〇―一―四三一七
印刷所　東京都千代田区神田神保町三ノ一〇　（株）共立社印刷所

日本弘道会編・発行

増補・改訂

西村茂樹全集

全12巻



㈱思文閣出版

西村茂樹の学問的な業績を中心に、その思想と活動の全貌を示す画期的全集の刊行完結。

第１巻：平成16年５月　既刊
定価17,000円（税別）

第２巻：平成16年12月　既刊
定価17,000円（税別）

第３巻：平成17年８月　既刊
定価18,500円（税別）

第４巻：平成18年８月　既刊
定価17,000円（税別）

第５巻：平成19年11月　既刊
定価18,000円（税別）

第６巻：平成20年11月　既刊
定価18,000円（税別）

第７巻：平成21年３月　既刊
定価19,000円（税別）

第８巻：平成24年３月　既刊
定価18,000円（税別）

第９巻：平成22年10月　既刊
定価18,000円（税別）

第10巻：平成22年３月　既刊
定価16,500円（税別）

第11巻：平成23年３月　既刊
定価18,000円（税別）

第12巻：平成25年３月　既刊
定価17,000円（税別）

内　容

第１巻 著作	西村泊翁先生傳、日本弘道會創立紀事、日本弘道會大意、日本弘道會婦人部設立の大意、日本弘道會要領（甲號・乙號）、弘むべき道、日本道德論、國民訓、國民訓對外篇、儒門精言、國家道德論、續國家道德論、道德教育講話、道德問答、修身講話、泊翁修養訓
第２巻 著作	德學講義、西國道德學講義、社會學講義、小學脩身訓、日本教育論、或問十五條
第３巻 著作	心學略傳、心學講義、初學寶訓、女子寶訓、婦女鑑、泊翁巵言
第４巻 著作	自識録、續自識録、記憶録、建言稿、往事録、偶筆
第５巻 著・訳	讀書次第、東奥紀行、随見随筆、校正萬國史略、萬國通史
第６巻 訳述書	萬國史略、防海要論、海防新編、農工卅種家中経済、経済要旨、輿地誌略、数限通論
第７巻 訳述書	泰西史鑑
第８巻 訳述書	格勒革力道德學、哈芬氏道德學、檀寧氏道德學、殷斯婁氏道德學、求諸己齋講義
第９巻 訳述書 日　記	理學問答、休物爾氏德學、査爾斯蒲勒氏要須理學、人學譯稿（査爾斯蒲勒氏）、希穀氏人心學、可吉士氏心象學摘譯、泊翁日記
第10巻	論説１　明治７年から明治27年までの間に、明六雑誌、脩身学社叢説、東京学士会院雑誌などに掲載された西村茂樹の論説を収録
第11巻	論説２、明治28年以降の論説、教育史、求諸己齋蔵書目録、皇太子御教育建言書
第12巻	泊翁存稿、樸堂小稿、漢詩・詩文補遺、泊翁書簡、雑文集、年譜、西村茂樹稿本目録、語彙索引

申込先

〒101-0065　東京都千代田区西神田３-１-６
日本弘道会ビル８F

公益社団法人　日　本　弘　道　会

☎03(3261)0009　FAX03(3288)0956　振替0140-1-4317

弘道
平成二十八年十二月三十一日発行

辞典の小学館

今が見える。未来へ更新する。
進化を遂げる辞典。

大辞泉【第二版】

◆類書中最大級の収録語数、最新用語を含む25万語
書籍の総項目25万語、DVD-ROM版デジタルデータの総項目25万7,000語。

◆最新の情報満載、進化・更新する国語辞典
DVD-ROMのデータは2016年まで毎年1回無償で更新。

◆読みやすさを追求し、横組みを採用
外来語の収録も増えたことから、日本の大型国語辞典としては初の横組みを採用。

◆類語・漢和辞典としても利用できる多機能辞典

B5判変型／上下巻／上製／ケース入り／総ページ数3,968ページ
（上巻「あ～す」2,000ページ・下巻「せ～ん」1,968ページ）

DVD-ROM付き

DVD-ROM付き（上下巻・DVD-ROMとも分売不可）
価格：本体15,000円＋税 ISBN978-4-09-501213-1

大絶賛発売中

小学館公式サイト https://www.shogakukan.co.jp 小学館 小学館愛読者サービスセンター TEL03-5281-3555

金五〇〇円（税込み）公益社団法人日本弘道会
本誌の購読料は会費（三、〇〇〇円）に含まれています。